

第1回九州地区国立大学間合宿共同授業報告書

<https://doi.org/10.15017/21061>

出版情報：九州地区大学一般教育研究協議会議事録. 1, 1977-05-31. 九州大学教養部
バージョン：
権利関係：

1. 第一回九州地区国立大学間合宿共同授業の実施経緯について

九州大学教養部

1. 昭和51年9月中旬に、九州大学武谷健二学長から奥田教養部長に、文部省・学長レベルの意向として、『国立大学間合宿共同授業』の試みにつき、その趣旨等の説明があり、九州地区で実施の見込みがあるかどうか検討してほしいとの勧めがあった。
2. この学長の意向をうけて奥田教養部長は、昭和51年10月6～7日の両日に開催された第25回九州地区大学一般教育研究会（於・大分大学）の際に、それに出席した長瀬佐賀大学教養部長、西岡熊本大学教養部長、高橋長崎大学教養部長の三人と会合し、共同授業の構想についての概要を説明し、意見を求めた。これら3大学の教養部長からは、いずれもこれに賛成する旨の意向が示され、九州大学が主催して、2月末から3月にかけてと、3月中旬の、前後2回に分け、長崎県島原市九州地区国立大学島原共同研修センターを会場とし、3泊4日の会期で、それぞれ100人ずつの規模によりこれをおこなうことに、意見の一致をみた。なお各大学では、このための部内態勢をそれぞれ整えることについても、申合わせがなされた。

共同授業の実施を前後2回に分けたのは、参加希望者が多いであろうとの予想と、入学試験の第一期校と第二期校との間には、2～3月の学内行事予定に差異があるので、参加の便宜を考慮する必要があるという事情との2つの理由による。なお当初は、第1回は文系講義に、第2回は理系講義に、それぞれ重点をおくことが予定されていた。

3. 本共同授業の具体的計画は、昭和51年10月19日～21日の両日に開催された九州地区国立大学教養部長会議（於流球大学）に正式議題として発議され、上記4大学のほか、鹿児島、琉球両大学も強い参加の希望を表明したので、これら2大学を加えて、参加大学を6大学とすること、及び今回の計画と実施には九州大学が当るなどの合意が成立、同時期に開催中であった6大学事務長会議にも報告し、了承された。
4. 各大学内でこの共同授業に対する態勢を整える必要上、昭和51年11月8日付で、九州大学武谷健二学長名により、佐賀、長崎、熊本、鹿児島、琉球の各大学長あてに、この共同授業に対する協力の依頼、及び計画の具体化に関する事務連絡は九州大学教養部長を中心とする各大学教養部長間でおこなうことが適切であると思われることなどの、二点を提案する書簡が送られた。

また同日付を以て、武谷学長から奥田教養部長あてに、共同授業の今後の企画運営等につき依頼状が送られた。

5. この依頼状をうけて奥田教養部長は、昭和51年11月11日前記5大学教養部長あてに、共同授業の実施計画試案を送付し、各大学派遣の講師名及びその講義テーマの回答を求めた。
6. 11月25日までに、各教養部長から参加する旨の回答が寄せられたが、琉球大学を除く各大学の場合、講師及びその講義テーマについては未定である旨の内容であった。九州大学教養部においては、この間11月17日の教授会に正式に提案され、「総合科目」として単位を認定することの可否については、本教養部内の総合科目委員会で検討し決定するとの合意を得ている。当委員会では、「2単位の認定には、計画案に予定されている授業時間数がやや不足しているのではないかとの疑義が残るが、基本的には参加学生に総合科目として2単位を認定してよいであろう」との結論が得られた。
7. 九州大学のほか、佐賀・琉球の両大学では、総合科目として2単位を認定することとなった。しかし、長崎、熊本、鹿児島 の3つの大学は、学内的に機が熟していないとの理由などで、今回は単位認定は行わない旨の通知があった。また九州大学教養部内では、共同授業を本年度2回に分けておこなうことは、事務取扱い上、難点があるとの意見があったので、3月中旬の1回だけに止めることで、関係各大学に通知し、了解をえることができた。
8. 九州大学は、以上のような経緯を経て共同授業実施具体案（要項案）を作成し、昭和51年12月25日付で、これを関係各大学に送付した。奥田教養部長は、単位認定をおこないうるように、この共同授業の形式をととのえるために、12月中旬文部省大学課と事務打合わせをおこなったが、このことについては、上記具体案のなかに、備考として次のごとく付記してある。すなわち、「この共同授業は、形式上は当該大学の授業の一部として取扱われるものであるので、単位認定等については、当該大学の教授会が自主的に判断することになる。したがって単位認定のためには、参加大学は最低一名の講師をこの共同授業に参加させなければならない」というのがその内容である。
9. 昭和52年1月27日～28日の両日、九州大学教養部の因幡庶務掛長と松崎教務掛長は、島原市に出張し、共同研修センター及び市内の状況を下見して、日程消化上の留意点などをチェックした。
10. 昭和52年2月1日、奥田教養部長名で関係各大学教養部長あてに、実施要項とともに、受講学生募集の開始、参加学生名簿の作成、引率責任教官（又は事務官）名及び参加教職員氏名ならびにその滞在予定（なお教官は全日程に参加することを原則としている）につき、2月25日までに返答するよう、依頼状を発送した。
11. 九州大学では、実施要項案の作成及び共同授業の企画・実施に際しては、学生たちの二ードとプログラムとの適合性を高め、本共同授業の運営と成果をよりよいものとするため、講義担当の講師以外に、とくに学生指導担当として、安藤延男教授の参画を求めた。

2. 第一回九州地区国立大学間合宿 共同授業実施要項

1. 目的 九州地区国立大学の学生と教官が一堂に集まり、寝食をともにしながら研修することによって、学生と教官並びに大学間の交流を深め、かつ、同一テーマについて多面的に授業をすすめることを目的とする。
2. メインテーマ 「戦後世界における日本」
3. 主催 九州大学教養部
4. 会場 九州地区国立大学島原共同研修センター（島原市礫石原町甲1201番地
電話 島原09576-4-2201 〒855）
5. 開催期日 昭和52年3月9日(水)～12日(土)の3泊4日間
6. 参加資格 佐賀大学教養部、長崎大学教養部、熊本大学教養部、鹿児島大学教養部、琉球大学教養部、九州大学教養部に在籍する学生
7. 参加人員 100名（佐賀大学15名、長崎大学15名、熊本大学15名、鹿児島大学15名、琉球大学15名、九州大学25名）
なお、参加人員100名のうちには、共同授業担当教官及び引率責任者を含む。したがって、当該大学の参加学生数は(15名－参加教職員＝参加学生数)とする。
8. 日程 ○ 第1日（3月9日）
オリエンテーション
講義「ヨーロッパ文化の日本伝来」
－セミナーヨ教育のこと－
交歓夕食会
映画又は自由討議
○ 第2日（3月10日）
講義「戦後日本の経済発展」
〃 「戦後日本の対外政策」
－安保体制と対アジア政策を中心として－
〃 「戦後沖縄における復帰運動の生成と展開」
－戦後世界における沖縄－

ソフトボール大会

講義「戦後日本における農村社会の変貌」

映画又は自由討議

○ 第3日（3月11日）

講義「環境破壊と自然保護」

〃 「自然科学における国際協力」(海外学術調査)

〃 「 」(南極観測)

グループ別討議及び史跡見学

スライドと話

映画又は自由討議

○ 第4日（3月12日）

講義「地殻における元素の濃集について」

全体討議

⑩日程表別紙

9. 講師と講義題目

(1) 「ヨーロッパ文化の日本伝来」

—セミナリヨ教育のこと—

九州大学非常勤講師
(純心女子短期大学教授)

片岡 弥吉

(2) 「戦後日本の経済発展」

九州大学教授

奥田 八二

(3) 「戦後日本の対外政策」

—安保体制と対アジア政策を中心として—

佐賀大学教授

岡本 宏

(4) 「戦後沖縄における復帰運動の生成と展開」

—戦後世界における沖縄—

琉球大学助教授

比屋根 照夫

(5) 「戦後日本における農村社会の変貌」

九州大学助教授

福留 久大

(6) 「環境破壊と自然保護」

熊本大学講師

今江 正知

(7) 「自然科学における国際協力」(海外学術調査)

九州大学教授

緒方 道彦

(8) 「自然科学における国際協力」(南極観測)

長崎大学教授 松本 徭 夫

(9) 「地殻における元素の濃集について」

鹿児島大学教授 浦島 幸世

(10) 「全体討議」

九州大学教授 安藤 延男

10. 参加申込 (1) 参加希望者は、当該大学教養部担当係へ参加費を添えて申し込むこと。
ただし既納の参加費は還付しない。
- (2) 当該大学は、参加者の名簿を2月25日までに九州大学教養部宛に送付する。ただし、参加費は3月9日(第1日目)に研修センターにおいて払い込むこと。
11. 参加費 食費：2,550円(3月9日夕食より3月12日昼食まで)
12. 単位の認定 当該大学の授業の一部と見做し、各大学の判断において、単位を認定する。
ただし認定することのできる単位数は2単位までとする。
(今次共同授業の単位認定について)
各大学で検討された結果次のとおり取り扱うことになった。
- 鹿児島、長崎、熊本の各大学においては、諸般の事情から今年度については認定を見送ることとした。
 - 佐賀、琉球、九州の各大学においては、2単位を認定することとした。
(認定の方法はレポートによる)
13. その他 (1) 持参品 筆記用具、ノート、洗面具、着換え類、パジャマ、運動靴など
- (2) 集合 参加者は、各大学毎にまとめて3月9日(水)午後3時までに九州地区国立大学島原共同研修センターに集合すること。
- (3) 解散 3月12日(土)午後1時現地で解散するが、参加者は各大学のバスで輸送する。

メインテーマ 「戦後世界における日本」

時 日	7	8	9	10	11	12	13
3 月 9 日 (水)							
3 月 10 日 (木)	起 床	朝 食	講 義 「戦後日本の 経済発展」 九 大 奥田教官	休 憩	講 義 「戦後日本の対 外政策」 -安保体制と対 アジア政策を 中心として- 佐大・岡本教官	昼 食	
3 月 11 日 (金)	起 床	朝 食	講 義 「環境破壊と自 然保護」 熊 大 今江教官	休 憩	講 義 「自然科学にお ける国際協力」 (海外学術調査) 九 大 緒方教官	昼 食	
3 月 12 日 (土)	起 床	朝 食	講 義 「地殻における 元素の濃集につ いて」 鹿 大 浦島教官	休 憩	全体討議 九 大 安藤教官	昼 食	

注) 講義・及び映画・スライドは大ゼミナール室で行う。

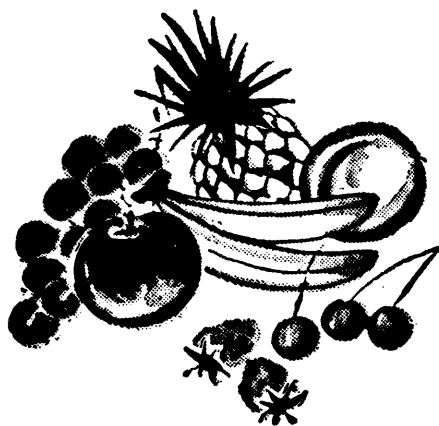
共同授業日程表

13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
車中分散 オリエンテーション		受付	自由時間	オリエンテーション	講義 「ヨーロッパ文化の日本伝来」 —セミナーヨ教育のこと— 九大非常勤講師 片岡教官	交歓夕食会 入浴		映画	自由時間	消灯就寝
		担当教官 打合会								
講義 「戦後沖縄における復帰運動の生成と展開」 —戦後世界における沖縄— 琉大・比屋根教官		ソフトボール 大会		自由時間	夕食	講義 「戦後日本における農村社会の変貌」 九大 福留教官	自由討議	自由時間	消灯就寝	
				担当教官 打合会						入浴
講義 「自然科学における国際協力」 (南極観測) 長大 松本教官		史跡見学		自由時間	夕食	スライド	合同コンパ	自由時間	消灯就寝	
					入浴					
解 散										

第一回九州地区国立大学間合宿共同授業参加者数

大 学 名	講 師	事務官	学 生		
			男子	女子	計
九州大学	5	4	26	2	28
長崎大学	1	1	2	1	3
佐賀大学	1	1	12	1	13
熊本大学	1	0	5	10	15
鹿児島大学	1	1	12	1	13
琉球大学	1	1	6	6	12
計	10	8	63	21	84

注) ほかに3月9日から10日午前中まで、高橋長崎大学教養部長が出席。



3. 第一回共同授業の実施状況（要旨）

(1) 講 義

① ヨーロッパ文化の日本伝来：セミナリヨ教育のこと

片岡 弥 吉（長崎純心女子短期大学）

1. 1534年、種子島にポルトガル人が来島したことは、鉄砲伝来よりむしろ「幻の金銀島」として知られた^{ジバングー}日本国が実在の国としてヨーロッパ人の関心を呼び、ポルトガル船を始めとする外国船が次々に来航、日本の貿易船も東南アジアに往来し、ヨーロッパに留学する日本人も少なからぬ数に達して日本とヨーロッパとの連帯が生まれたことにある。日本人の視野が「本朝、唐、天竺」から世界に広がる。ヨーロッパ文化が伝来し、そのヨーロッパ文化の中心学府となったのがセミナリヨである。1580年織田信長の安土城下と有馬晴信の日野江城下（長崎県北有馬町）に設立された。それは本能寺の変、豊臣秀吉のキリシタン禁令発布など頻発する政変とキリシタン弾圧の中で転々と移動を余儀なくされるが、学問・芸術の教育は、1614年の徳川家康のキリシタン弾圧によって閉鎖を余儀なくされるまで、34年間絶えることがなかった。この間、ラテン語によるローマの古典、日本、中国の古典をはじめ、西洋音楽、油絵、水彩画、グーデンベルグ式印刷機のための字母彫刻、時計や天文儀器の製作も教えた。

それは、足利学校や京都五山などの東洋学に対して、西洋学の中心となり、世界性という日本の近世文化の性格決定に大きな影響を与える。

特に注目すべきは、セミナリヨのヒューマニズムがルネサンス的なものでありながら、神から解放した人間尊重の精神を強調したことにある。それを要約すると次のようになる。

A 人格としての人間形成と、最高絶対の価値への指向

B 調和的人間像 ①心身の調和、②知・情・意の調和、③日本的なものとヨーロッパ的なものとの調和した世界人

③については特に次のごとくのべられている。

「われわれは、日本人をヨーロッパ人として仕立てるのではなく、日本人の持つよきをとことんまでのばし、日本人のもたないヨーロッパ的なものを与えて人間として成長させる」

しかし、優位においたのは知性であった。「無知はあらゆる悪の根元であり、徳の死である。殊に有害なのは人に教えることを職とするものの無知である」と説いた。

また、論理性と言葉による表現力を重視し、テキストとしてヴィルジリウスの詩集、チチェロの文集などローマの古典をラテン語原文で用い、四書五経、太平記抜書、平家物語、舞の本、和漢朗

詠集などの東洋の古典、ラポ日対訳辞書、日ポ辞書、漢和辞書などを印刷して用いた。

2. 戦後世界の日本に欠けたものの第一は物質文化に対する精神の欠除、確固たる人格の確立による意志的人間、自己犠牲にもとづく人間愛と、個人は社会によってその必要を充たすと共に、社会に貢献すべきものという精神、である。セミナリヨ教育は個人の人格成長のために学び、学び得たことによって社会に貢献するという指向性を強力に推進した。

かつて島原半島の辺地有馬地方で行われたこの教育に、戦後世界の日本人が学ぶべきことはまことに大きいものがあり、セミナリヨのヒューマニズムこそは現代日本が最も必要とするものの一つであると思う。

② 戦後日本の経済発展

奥 田 八 二 (九州大学)

この講義はメインテーマ「戦後世界における日本」の経済的背景を概観するため、共同授業のトップにおかれた。37ページにわたる講義内容プリントが配布され、これはあとで精読するようにすそその内容の主たるポイントを説明した。講義後の感想は低学年非専門の学生には消化不良であったのではないと思われる。しかし、折につけ必ず講義のはしばしが想起されるのではないだろうか。

講義の内容

統計数字や統計表を40表、グラフを5図用いて日本の経済発展を1930年（昭和5年）から1975年（昭和50年）まで量的変化としてトレースした。項目は以下のとおり。

人口、世帯数、世帯人員、年齢階層別人口、大産業別就業者数、実質国民総生産、経済成長率、国民純生産の産業別構成、国民所得、産業分類別生産指数。

ここで、戦前の経済成長と戦後の二つの時期区分（昭和30年以前と以後）別の経済成長の特徴を指摘し、欧米主要諸国とのその比較をおこない、日本の経済発展の特殊性の原因指摘に及ぶ。

次にいわゆる‘60年代の繁栄、の内容分析に入る。経済成長率、輸出入と外貨保有、国民所得、三大分類産業構成別就業者の変化の諸側面を欧米と比較してみる。ここから日本経済の急速な重化学工業化、資源加工型経済への移行、人口の都市集中、過密・過疎問題が指摘され、同時に‘石油ショック、以後今日の経済的諸困難、すなわち重要資源食糧の海外依存問題、繊維、ゴム、鉄鋼、電気器械輸送機械（自動車、船舶）、精密機械などの諸生産部門の輸出依存度上昇の問題が指摘され、このことから現在の日本経済は世界経済の中に深くコミットせざるをえない立場におかれると同時に、わが国の経済と世界経済が同時に調和ある発展の途を協力して追求すべき課題が負わされていることを説明した。

このことはまた、`60年代の繁栄、を無反省に再来させようとすることは今は不可であるから、経済政策の転換が不可避であることを示している。その点資料を用いて60年代の成長政策のどこに問題があるかを説明した。

③ 戦後日本の対外政策

— 安保体制と対アジア政策を中心に —

岡 本 宏 (佐賀大学)

戦後の変動する世界のなかでの日本の対外政策の特徴を日米関係とアジア政策を中心に概観し、そこにふくまれている問題点について以下のように講述。

まず、戦争をくりかえしてきた戦前の対外政策の概要とその要因について一、二言及し、それとの対比で、敗戦にともなうポツダム宣言の受諾からアメリカの初期占領政策による諸改革、そして日本憲法が予定する平和外交と外交の民主的統制という一般原則について説明したあと、この原則が、冷戦の進行、とくに中国革命、朝鮮戦争のインパクトでどのような影響をうけ、さらにサンフランシスコ平和条約、日米安全保障条約の締結によってどのような変容を迫られたかを略述した。

とくに、安保条約の締結、1960年の同条約改訂、1967年と69年の日米共同声明という日米関係の進展によって作りだされた日本外交の基本的枠組みが、中国、朝鮮、ベトナムを中心とする日本の外交政策の面で、憲法が想定した対外政策の基本原則とどのような緊張関係や矛盾をはらんできたかを若干の事例をあげて説明し、今日のデタントの一定の進展のなかで、いま一度、憲法制定当時の原則にたちかえって日本の対外政策を再検討する必要性についての指摘をおこなった。

④ 戦後沖縄における復帰運動の生成と展開

— 1950年代の復帰運動 —

比屋根 照 夫 (琉球大学)

いわゆる“異民族支配”、“異民族統治”と言われたアメリカの沖縄統治とは、戦後世界の日本の中においてどのような意味を持ち、どのように位置づけられるべきか、更にこのようなアメリカの沖縄統治下において日本復帰運動はどのように出発し、生成されたか。これが本講義の目的である。1952年4月、対日平和条約の締結によりアメリカの統治下にはいった沖縄の復帰運動はきわめて限定されたオピニオン・リーダーの手によって推進されていた。こうした少数のオピニオン・リーダーの運動を大衆のレベルに高め、戦後史の中に沖縄問題を登場せしめたのが1956年6月、プライス勧告の公表に端を発する軍用地接收反対運動（いわゆる“土地闘争”）であった。

この運動は、米国統治下の50年代の諸々の問題を内包しつつ、軍用地問題の終局的な解決を日本復帰によって達成しようという所にその特質があったといえる。したがって、この運動において台頭した復帰理念は、私的所有権の護持、市民的諸権利の擁護という米国への要求から、領土権民族自決の要求へと拡大展開されたところにその特質があったと言わねばならない。言いかえれば、市民的諸権利（「私」）の擁護という主張が、米国の沖縄統治を排除する民族自決（「公」）へと展開され、デモクラシーとナショナリズムが緊密に結合した所に50年代の復帰理念の特質があったと位置づけることができる。

こうして、1956年6月段階に出発したこの運動は、6月20日、6月25日の両住民大会を経て空前の大衆的昂揚を画し、7月段階には一挙に日本本土へ拡大し、ここに日本戦後史の中に沖縄問題を噴出させるに至る。1950年代の復帰運動は、軍用地問題を契機として出発し、これが60年代の復帰運動へと精神的に継承されていくのである。

⑤ 戦後日本における農村社会の変貌

福 留 久 大 (九州大学)

戦後日本の農村社会の変化を惹起した大きな出来事として、終戦直後の農地改革と、高度経済成長の過程における農村人口の農外流出、それによる兼業農家の激増とを挙げることに、まずは大方の同意が得られるであろう。

たまたま、1975年1月～12月に朝日新聞は、その日曜版に「昭和経済50年」と題したシリーズを掲載したことがあったが、全50回戦後29回のなかで、戦後の農村を取扱ったものとしては、6月15日号「農地改革」と9月5日号「三ちゃん農業」の2回があった。この連載は、とりまとめられて1976年『昭和経済50年』という題名の一冊の本として刊行された。講義時間が限られていた（90分間）ので、あらかじめ学生諸君に講義内容の概略を把握しておいて貰うのが好都合であるとの判断から、「農地改革」の項と「三ちゃん農業」の項との複写と、そこでの記述を裏づけるデータを筆者の論文等から抽出したものを、資料として配布しておいた。

実際の講義は、時間配分に順調を欠いたこともあって、「農地改革」についての解説にほとんどの時間を費し、高度経済成長の農業・農家・農村への影響の端的な表現である「三ちゃん農業」については、ごく僅か触れたにとどまらざるをえなかった。

「農地改革」に関して講義したことの概要は、ほぼ次の通りであった。

① 『昭和経済50年』中の「農地改革」の項は、農地改革の内容、経過、効果について簡潔に述べ、なかでも特にこの農地改革の成功が世界的に例の少ないものであること、その成功のナゾとして農地改革に結実するような動きが戦前からあったことを強調している。一応この記事の紹介によって、農地

改革の全体像を理解することができると思う。

② そのうえで、記事中に2回でてくる「地主と小作人の封建的な身分関係」という語句に注意を喚起する。「封建的な身分関係」という風に農地改革前の地主・小作人関係を理解する背後には、戦前の地主・小作人関係において、小作料が水田に関しては主として物納であったこと、小作料が収穫にたいして1916-20年平均51%、1933-35年平均46%と高率であったこと、この2点から明治維新前までの年貢米との著しい類似性が推測されること、などの事情が存在していた。

③ 「封建制」とか「封建社会」とかを典型的な形で考えてみると、直接生産者たる農民は、共同体関係を通じての土地との原生的結合によって生産手段を保有しており、その意味で生存の保証を有しながら、他方では領主にたいする農奴という身分のちがいに基く経済外強制によって（つまり権力的関係によって）賦役ないし貢納の義務を負い、人格的自由を有していなかった。そういう状態を基準として、戦前の日本の農民を考えると、土地私有制によって、農民と土地との原生的結合は切断されていること、職業・移転の自由が法的に保証されていることなどから見て、これを封建制の下にあるとすることは出来ないだろう。

④ 「資本主義」を、「封建社会」との対比においてみると、その成立の前提として「二重の意味における自由」な——封建的束縛から自由であるとともに、生産手段たる土地から自由であり、離れ、解かれている——労働者の存在を必要とする。そのうえで、徹頭徹尾商品経済化が進み、商品による商品の生産がなされる——生産の二要素、生産手段と労働力が商品として購入せられ、両要素の結合によって商品が生産される。そういう状態を資本主義的生産の基本とみるならば、戦前の（戦後も含めてもよいが）日本の農業生産が、資本主義的なものであったと言うことはできないだろう。

⑤ それでは、なぜ高率の物納小作料という封建社会の貢納とまぎらわしいものが、戦前の日本の地主・小作関係の下に存在したのか。その答えの基本は、日本が鎖国を破って近代世界に登場したとき後進の資本主義国として、帝国主義段階・金融資本の時代を迎えようとする先進資本主義国（英・米・独など）の圧力下に置かれたということにあるのではないか。先進資本主義国にアジア市場はいうまでもなく国内市場さえおびやかされなければならなかった日本においては、殖産興業の旗の下に国家の援護を受けつつ資本主義的工業の移植をはかったのであるが、その規模はリリパット（小人国）的なものに踟躇せざるを得なかった。加えてその工業生産における生産手段は、先進国から輸入した高度な技術水準の機械類を中心としていたために、著しく労働力節約的であった。こうして、資本主義的工業生産のため必要な「二重のいみにおける自由」な労働者は少数で足りた。他方、日本の都市は江戸時代において他国のそれに比し、優るとも劣らない大きい人口を擁していたので、労働者の供給源として大きな比重を有した。そういうところから、例えば英国の資本主義成立期にみられたような大規模な農民の土地からの放逐という動きは、日本においては行なわれなかった。

農村は、商品経済の影響下におかれながらも、徹頭徹尾商品経済化されるのではなく、家族労作的小農経営として残された。そこから、「利潤追及」ではなく「生活維持」を行動原理とする小農民たちの、土地借入れ競争の激化が生まれたのではないか。しかも地主・小作関係といっても、完全な地主、完全な小作は案外少なく、自分の土地を耕作しつつ他人の土地を借入れて耕作する自小作あるいは小自作が相当に多かった。これらの農民は、自作部分で自己の生活の最低限の基礎を得つつ、わずかながらも収入・所得を加えるために小作地借入を懸命に行なった。このような形で激化された借入競争が小作料の高率をもたらしたのではないか。また物納の点では、食糧管理制度が今日のごとくに整備されていない戦前にあっては、米価の季節的変動は極めて著しく、金納のため収穫米を出来秋に売りにだせば、米商人に巨利をもたらす一方、小農民は著しく低米価しか実現できない不利に泣かねばならなかったであろう。それは、地主にとっても何ら有利な条件ではない。こうして、小作料物納が商品経済への小農民的対応策として選択されたのではないか。

⑥ 環境破壊と自然保護

今 江 正 知 (熊本大学)

近年は、公害や自然破壊による生活環境の劣悪化や破壊が各地で問題になり、環境問題に対する関心が高まってきている。とくに戦後における日本の工業の発展は、農業を基本として成立していた半自然の調和を破り、思いがけぬ所に思いがけぬ影響を生じることが多くなっている。

しかし、自然破壊は現代だけでなく、古代から行なわれてきたことである。農耕の開始は原自然の植生を改造(破壊)して特定の作物だけを栽培(単純群落の育成)する不自然なこと、つまり自然破壊とすることができる。それが、自然の報復を受けない範囲で行なわれていれば、人間の生活を豊かにし、それを基礎にして文化を築きあげることができた。しかし、過度の自然改造または利用によって文明そのものが滅亡したメソポタミアやハラップなどの例があることも忘れてはならない。

自然保護、環境保全の基本は、人間も生物社会の一員として、他の多くの動植物との共存の上にし、人間が生きていけないことを正しく認識することである。その意味から、水俣病も人間社会だけのこととみるよりも、生物社会の食物連鎖の中で、有毒物質が薄めても無毒にならず、逆に濃縮されると知ったことが最大の教訓である。山林の伐採や道路の建設または工場の排気、排水からゴミ処理にいたるまで、現代の環境問題は、自然に対して強力になり過ぎた人間の文化と自然との係り合いとして生じている。

生物社会の法則には、まだ不明な点が多い。しかし三十数億年の試行錯誤の結果到達した生物社会の安定機構は、一面的な人間の見方よりも、はるかに複雑微妙な調和の上に成り立っている。この調和を守りつつ健康な生活環境を維持することが今日の課題である。

レポート課題

1. 高山植物のお花畑の保護のため、立入禁止の札を立てたり、柵を作っていることもある。それを見て「野生の鳥獣は勝手に出入し、貴重な高山植物を踏みつけたり、食べたりしている。人間だけを差別して立入禁止にするのは不公平だ」と異議を唱えた人がある。この人に対して、何と説明したらよいか。
2. 世界各地で貴重な動植物が絶滅したり、絶滅の危機にひんして、その保存対策がいろいろととられている。ある種の動植物の絶滅を防がなくてはならない理由はなにか。
(B5判、400字詰原稿用紙に横書き、表紙をつけ、とじて提出)

⑦ 「自然科学における国際協力」

—— 海外学術調査 ——

緒 方 道 彦 (九州大学)

戦後世界の科学・技術の発展には、目覚ましいものがあるが、その中でも国際地球観測年（IGY）の成果と意義は画期的であったといえよう。

それは、南極地域の恒久的・平和的な観測事業の始まりとなるのみならず、ロケットの開発、そして人工衛星—宇宙時代の幕開けともなったものである。

戦後はじめて日本の科学界が参加することになった南極観測は、過去2回の極年（IPY）の延長として、地球物理学を中心としたが、日本にとって南極は白瀬隊の古い経験のみであり、さらにプリンス・ハラルド沿岸は人類にとっても未踏の地であった。このため、第1次観測隊の課題は、広く科学各領域さらに技術界の総力を結集する必要があった。

“科学は、破壊のためではなく、人類の福祉を増進するためにこそある、（当時の宮地天文台長）の言葉は、共通の認識でもあったが、その理想のもとに進められた第1次南極観測の準備と、出発—接岸—基地設定の経過を、第1次隊員としての参加体験にもとづきつつ説明した。

この実例を参考として、「サイエンティフィック・エクスペディション」が、科学の発展・学問領域の展開に対してもつ意義を考察するとともに、未知の（科学的にも、地理的にも）場での研究者の資格・能力の問題、専門的な調査・観測のみならず、設営メンバーとしての多様な能力、そのための多様な訓練の実際についての理解を深めることを強調した。

最後に、個別専門の既存体系の中に小さくまとまり安住することなく、人類の未来を拓くものとして、**Read Nature, Not Books** という言葉について考えるよう求めて、結びとした。

⑧ 自然科学における国際協力 —南極観測—

松本 徑夫 (長崎大学)

1911年12月、アムンゼン (ノルウェー) 隊が最初に南極点に到達した。これにおくれること約1ヶ月で英国のスコット隊は1912年1月、南極点に到達したが、帰路全員遭難の悲劇に終る。一方、日本隊としては白瀬隊が1911~1912年、ロス棚氷の沿岸で開南湾を発見し、犬ぞりで大和雪原を調査する。

1957~1958年の国際地球観測年 (I.G.Y, International Geophysical Year) を契機として国際南極観測がスタートした。これに従って、南極大陸に科学観測基地を前進させることを決定したのは、フランス、ニュージーランド、ノルウェー、南アフリカ共和国、イギリス、アメリカ、ソ連および日本の12ヶ国であった。

一方南極条約は各国政府の批准を受けて、1961年6月23日から発効している。これには当初12ヶ国が加盟していたが、その後ポーランド、チェコスロバキヤ、デンマーク、オランダが加盟している。

日本においては、1956~1958年第1次南極観測隊 (隊長 永田武、越冬隊長 西堀栄三郎) が観測実施され、途中基地閉鎖があったものの、現在第18次隊が越冬中である。その間、第4次隊 (1959~1961年) では福島隊員の遭難があり尊い犠牲を出した。しかし一方ではやまと山脈の発見と初の調査がなされた。第9次隊 (1967~1969年) には南極点を往復して種々の調査がなされた。

さて、演者は昭和49年11月から昭和51年3月まで日本を離れて、第16次隊の越冬隊として地質学的調査を担当した。その間、リュツオホルム湾沿岸の調査や、やまと山脈の調査、昭和基地北部の小島の調査を行なった。これら調査の様子や、越冬生活などについて、スライドを使用して講演した。映写スライドは約240枚であった。

⑨ 地殻における元素の濃集——とくに銅鉛石について

浦島 幸世 (鹿児島大学)

1. 鉱物資源と生活：われわれが利用する鉱物資源はたいてい生活している場所から得られているものではない。ある元素、あるいは、ある鉱物がとくに濃集しているところをしらべて、人類の生存に必要な鉱物を確保し、公平に配分することがたいせつである。
2. 貿易：日本の輸出の大部分は鉱物資源を加工したものであり、輸入の半分以上はその原料とエネルギー資源である。このことは日本に鉱物資源が少なく、ほかの地域にその分布が偏在していることを示している。
3. 地球の化学成分：いん石の研究からも推定されるように、地球の地殻と内部では元素の存在比がちがっているが、地殻も元素の分布は一様ではない。

4. 鉱物資源の偏在：原油の地域別埋蔵量、日本の鉄鉱石の海外依存先、金銀銅の国別生産量、銅鉱石の地域別埋蔵量や日本の銅鉱石輸入先などが、偏在状況を示している例としてあげられる。
5. 元素の濃集倍率：鉱物資源として利用されるためには地殻の元素の存在比にくらべて、鉄は4倍の25%、銅は100倍の0.5%、また、金は4000倍の8g/tかそれ以上濃集していなければならない。
6. 鉱床の分類：そういう濃集倍率に達しているところを鉱床というが、それはさまざまな地質作用によって形成されている。
7. 銅の鉱床：銅ペースト、キースラーガー、含銅粘板岩、斑岩銅鉱、黒鉄鉱床などがおもな銅鉱床で、それぞれ銅の濃集過程がことなり、分布が限られている。
また、深海底に銅を含むマンガン団塊があることも知られている。
8. 銅の鉱物：鉄鉱石中では銅はさまざまな銅鉱物として含まれ、その研究は鉱床の成因、探査、鉄鉱石処理のために重要である。
9. 銅の生産量と消費量の推定：1980年代には、銅の生産量は減少傾向を示し、消費量がそれを上まわるようになることが推定される。
10. 銅不足の対策：銅消費量の制限、代替品の使用、再利用などでは対策として不十分で、未開発鉱床の調査や新鉱床の発見のための投資が必要である。非更新性である鉱物資源は人類共通の財産で戦争でむだづかいせず、確保することに、日本も貢献しなければならない。
(銅の鉄鉱石標本を展示し、スライドで銅の鉱物を説明)

(2) 自由討議

① 分散会：時事問題について

学生約15名 教官 比屋根照夫 (琉大)
岡本 宏 (佐大)

学生代表による司会のもとに自己紹介にはじまり、主として以下二点について討議がなされた。

1. 食糧危機と人口問題、とくに発展途上国における深刻な人口爆発の問題について。
2. 戦争勃発の危険性、とくにベトナム後の朝鮮の情勢とそれに対する日本およびアメリカの対応をめぐって。

討議は活発で予定の時間を約30分こえ最後に教官が、出された問題をふまえて、今後考えるべきことについて要約、問題提起をおこなった。(岡本)

② 第2分散会・学園生活の意義（於大講義室）

奥田八二（九大） 緒方道彦（九大）
今江正知（熊大） 浦島幸世（鹿大）

参加学生43人で、この共同授業参加者の半分を占めた。

鹿大の学生が座長、最初奥田がこの分散会の討議方向についてサジェストしただけで発言は終始学生側に委ねられた。発言はだんだん積極性を帯び、予定時間の午後10時になっても閉会しようとせず、11時10分に、教官のすすめで閉会するほどであった。一言で教養部生活といっても、大学によりカリキュラムや専門学部との関連が違うので、学生たちは他大学の事情を知りたがっていた。自分の大学の欠陥を是正すべく教官に訴えるシーンもあった。教養課程は単位取得に余裕があるが、その時間的余裕こそ有効に利用して教養課程らしさを生かそうという肯定的発言が多かった。また高校生活から大学生活への変化に“とまどい、を訴える学生が多かった。クラス・ルームがなく、単位取得規制がない自由の中に突き放され、手がかりがなかなかえられない孤独の一年がまたたく間に過ぎるようだ。この孤独と無為を解消するため教養部の学生施設の拡充、課外活動の奨励、教官と学生との正課外での接触機会の増大、他大学との交流拡大など学園生活を正課以外の場で充実させるよう大学の側の努力を期待する声が強かった。そしてこの合宿共同授業も、その意味において大きな意味があるものだとして肯定していた。（奥田）

③ 第3分散会：男女交際について（於大食堂ホール）

参加学生数22名（男16，女6） 教官：安藤延男（九大）
福留久大（九大）

琉球大学学生の真栄平君の司会のもとに、まず各自、自己紹介を行ったあと、話し合いに移った。はじめ、各人が順に「理想の異性像」について披露しあい、それをめぐって質疑応答がなされた。次いで、異性との交際のきっかけの作り方、アプローチなどについて活発に意見の交換がおこなわれたが、それを通じて、男女交際についての意識面の男女差がかなり明確にされたようである。なおこの話し合中、2人の教官は、理想の異性像において看過されていると思われる二・三の点について、率直な意見をのべたりした。

この会合は予定どおり一時間半で閉じたが学生たちは、自ら口を開き自らの意見を吐露できたことや、同輩たちの考えを聞く機会を持ちえたことに満足をおぼえ、さらに相互に親近感を増しえたように見受けられる。（安藤）

(3) 映画「薬物依存とアルコール中毒」上映

3月9日（水）20.30－22.00

本共同授業用として借用しているフィルムは、6本（いずれも岩時映画社制作、藤沢薬品KK福岡支店フィルムライブラリー所蔵）であったが、会期中は初日だけ映写会を催し、「薬物依存とアルコール中毒」（加藤正明監修）一本を供覧するに止めた。フィルムの内容は、薬物嗜癖者やアルコール中毒患者の地域的、集団的治療やリハビリテーションを主題とするものであったが、上映に先だち緒方道彦教授（九大、生理学）から、とくに急性アルコール中毒の症状に関する解説が行われ、学生たちの参考に供された。

なお共同研修センタの備品である映写機は、音声の再生が思わしくなく、操作には少なからず難儀を覚えたことを付記しておきたい。（安藤）

(4) 史跡見学（島原城と武家屋敷）

3月11日（金） 14.30－17.00
（参加者全員が貸切バス2台に分乗）

島原は、キリシタン文化によって彩られた歴史の町である。この共同授業の開催に際して、島原のキリシタン文化の一端に触れることができれば、参加者にとって少なからず有益であろうと考え、プログラムに史跡見学を織り込むことにした。晴天の午後、観光客もまばらな島原城では、キリシタン関係の文書や器具・祭具ならびに松平氏の武具や什器類などの陳列を見学し、天守閣の最上層からは有明海からさらに九州山脈の山なみを眺望することもできた。学生たちは初日の片岡弥吉教授の講義のほとぼりも残っていて、キリシタン関係の文物にとりわけ関心を示している様に思われた。

武家屋敷は、中級武士のものとの解説の付されたものを見学した。

帰りのバスでは、ガイド嬢の島原ことばの披露があり、島原の子守唄も聞かせてもらった。（安藤）

(5) 懇談会・教職員学生の懇談の夕

3月11日（金）20.30－夜半（食堂ホール→居間）

これは、前日に学生側の世話人（7人で構成）の申し出を受けとめ、共同授業運営委員会で協議し学生側の企画運営によるセッションとして実施することを決定したものである。佐賀大学学生の司会のもとに、まず少量のビールを乾杯したあと、各大学が1グループとなって、それぞれ得意の出し物を披露したあと、教官、事務官も学生たちの拍手に迎えられて、得意の秘し芸を披露した。

また、次第に各大学の学生や教官なども入り乱れて、混成のチームが作られ、交歓は最高潮に達した。10時ごろ、食堂ホールの会を切上げ後片付けののちに、二、三の部屋に集合して、数人ずつの小グループによる懇談がはじまった。これらの小グループは、それぞれ必ず教官もしくは事務官が加わっており、学問、人生、宗教、職業、大学の自治などと、その話題はそこはかたなく漂うといったものであるが、学生たちの多くが、これこそ大学というものの標本なのだと述懐するほどに、彼らに満足感をもたらした様である。

なおこうした満足感はそのセッションの成果（打ちとけあえた、教官や事務官の人間的側面に觸れえたなど）だけによるものではないことも書きとめておかねばならない。というのは、このセッションが、学生たちの自発的企画になり、かつ自らのアイディアで実施しえたということに、とくに満足を示すものが少なくなかったからである。どのように上等の料理でも、定食だけをあてがわれたのでは、食傷するであろう。今回のプログラム作成において、こうした学生自身のアイディアをとりいれうる余地を残しておいたことは、よかったのではないかと考えている。（安藤）

(6) ソフトボール大会

松崎耕治（九州大学教養部 教務掛長）

当初、この時間帯は「グループ別討議」が計画されていたのであるが、授業日程が過密で学生も窮屈ではないかということで、日程表が最終的に決定される際に、「ソフトボール大会」を組み入れたものである。

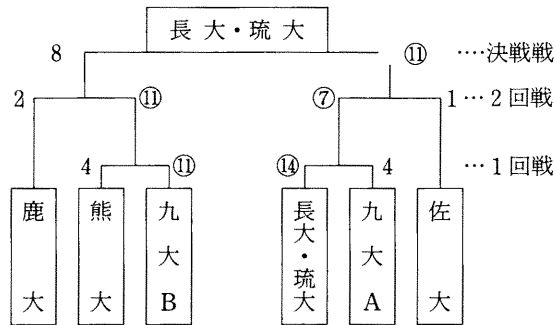
研修センターの野球場は、芝生を植えつけたばかりで、まだ一度も使用されたことのないものであったが、「使用后グラウンドの整備を行なう」、「芝生の上には乗らない」という条件で、使用の許可を受けたのである。

前日に「交歓夕食会」がもたれたが、参加学生たちは他大学とのこうした交歓は初めてであったためか、いわゆる「うちとける」までにはいたらず、従ってこのソフトボール大会を大学間の交流の場とすべく期待していたようであった。

当日の朝食後各大学の学生から互選された「学生世話人」のミーティングをもち、グラウンドの使用条件等について注意を与えたのち、抽選を行ない、次のような試合の組合せが決定した。なお次図には、対戦の得点を数字で併記しておく。

ひきつづき、試合方法等について協議が行なわれた結果、次のとおり確認された。

- (1) 1チームを9名で編成する。
- (2) 9名の中には女性1名と、30才以上の教職員を必ず含めておくこと。



(3) 試合は5回戦とし、同点の場合はジャンケンで勝敗を決定する。

ただし決勝戦に限り、5回まで同点の場合は7回まで延長を認め、なおかつ同点の場合は、ジャンケンで勝敗を決定する。

(4) 審判は試合をやっていないチームが責任をもつこと。

(5) その他については審判に一任する。

担当者として一番気にしていた天気も、晴天にめぐまれ、上々のコンディションであった。第3回目の授業を終えた教職員と学生たちは、2時半すぎに全員グラウンドに出て準備体操を行なった後、それぞれ第一、第二グラウンドに分れ、互に挨拶をかわして熱戦のスタートを切った。

各大学とも、選手の中にはソフトボールを全くやったことのない学生も含まれていたが、各チームとも秘策を練り、熱烈なる応援をうけて試合を展開した。決勝戦は、長大・琉大の合同チームと九大Bチームの間でなされたが、延長6回の末、長大・琉大チームが11対8で九大Bチームを下し、優勝を決めた。

とにかく、学生同志、また学生と教職員との間の交流を深めるうえでこのソフトボール大会が非常に意義深いものであったことは確かなようである。

(7) 全体討議「共同授業を体験して」

(バズセッション方式による意見・感想発表)

高野アイ子 (九州大学学生部 教務掛長)

1. 共同授業 (集団生活) について

- 企画や講義は大学側から与えられたものであったが、我々学生が自主的に参加することによって、意欲的積極的に取組み充実した共同授業になった。
- 他の諸大学との交流が十分出来た。各大学の枠を越えて一緒に生活することが素晴らしいもの

であることがわかった。しかも自分の大学の学生・教職員とも接触が出来たことは非常によかった。普断接することのない教官の一面にふれることができて人間味を感じた。教官達と同じ屋根の下で同じ食事をし、一緒にだべった。確かに寝食をともにしたという実感があった。

- 共同生活における「他律」のよさを知ることができた。
- 各大学の教養課程において最も不足しているもの——教官達も教養課程における不足している点に対する理解は、これまでも十分にあったと思うが——をカバー出来たと思う。こういう体験が教養課程における本当の一般教育のあり方をあらわしていると思う。
- 他の大学の教官の講義を要請できるのは非常に機会が少なく、琉球大学では年間2回程度だが今度の共同授業に参加して一度に8人もの他大学の教官から話がきけたのはよかった。
- 新しい友をえた。普断話題にのぼらないことについても話し合いをし、話し合うたびに新しい角度から考えることができた。九州内の各地域の問題を自分の問題として考えることができた。結果的には新しい問題意識が芽生えた。他面こういう話し合いの機会は、これまで友人を含め周囲の人達との話し合いは、いわばなれ合いの討論であったのに、初めての人と真剣に話し合うことができた——勇気のいることであったが——しかも悪びれずに話しができたのは予想外の収穫でよかった。
- 参加資格は教養部学生に限らず、広く専門課程に在籍する学生や、九州地区の公、私立大学の学生も加えてもよいのではないか。

2. 講義内容等について

- 講義内容については最初からあまり期待していなかった、中にはメインテーマ「戦後世界における日本」にそぐわず無理失理くつつけたような内容のものもあった。単位をもらえばよいという考えで参加した。
- 面白かった。講義内容をさらに豊富にしてもらいたい（教官1人当りの持時間が短かすぎる）。講義の盛りあがったところで切れるように思った。
- 教官の専門分野についてもっと深い内容のところまできくことはできなかったと思うが、意識をたかめることには非常に役立った。
- 講師には大学の教官だけでなく在野の民間研究者も登用してよいのではなかろうか。
- 講義は、学生に一方向的にきかせるというやり方ではなく、学生の方からも質問をして討議をおりませるということをやってもらいたかった。
- 大人級のクラス方式だけでなく少人数のゼミナール形式もとり入れてほしい。
- 講義要項等の資料は事前に渡してもらった方が予習ができてよかった。
- スライドなどを使ってやる講義は内容も判りやすく面白かったので、今後もっとふやしてほしい。

い。

3. スケジュールや運営について

- 日程は今回の3泊4日では物足りない。もっと長くしてもらいたい、そして自由時間や討議の時間ももっとふやしてほしい。
- 自由討議は今回の場合、グループサイズが大きすぎた。もっと、小グループ（10人くらい）に分れてやった方がよい。
- 生活指導が行き届いていてよかった。

以上が「全体討議」における学生たちの感想・意見・要望などの概要である。

なおこの全体討議は、84名という大人数で、しかも限られた時間内に行われたものであるが、これをより効果的に実施するために、二、三の工夫を要したので、書き添えておきたい。第一は、参加者全員に対し、あらかじめ『討議の手びき』（民主教育協会パンフレット、領価100円）を配布したことである。これにはいろいろの討議法が手際よく解説されており、討議のリーダーはもとより、その参加者にとって有益な内容である。思うに学生たちは、これまでの大人数の討議グループにおいて、何がしかの失敗や不満を経験しているにちがいない。こうした不満は、討議グループへの参加を妨げるものにもなるが、他方新しい討議法の学習に対する内発的な動機づけともなりうるものである。こうしたパンフレットの配布は、彼らのそうしたニードにマッチするものであったと考える。

第二の工夫は、このパンフレットのなかの一つの技法（バズ集会法）を実演しつつ、この全体討議を展開したことである。グラビアにもあるように、数人が1グループとなって数分間の話し合いを行い、次いで各グループは、それぞれの話し合いの内容を他に対して報告し、全体討議に移っていくというものである。こうした方法は、大人数の、討議に対する全員の参加と満足、話し合いの効率化などに資するところはきわめて大きく、かつ誰でも、特別の準備なしに行えるものであることを体験する機会となりえたであろう。



4. 第一回共同授業の評価と反省

(1) アンケート調査の集計から

安藤 延 男 (九州大学)

これは最終日実施のアンケートへの回答ならびに全体討議の口頭発表などによって得られたものであるが、ここでは当該アンケートの質問項目1から5までの5項目（いずれも数量的に処理可能）に限って、その単純集計にもとづき報告するにとどめる。

なお、回答者総数は84名（男63、女21）である。

表1：参加の動機

質問1. この共同授業に参加することを決めたきっかけは何ですか。

大学	(1) 自分から 進んで	(2) 友人に すすめられて	(3) 大学に すすめられて	(4) そ の 他	計	(%)
九 大	25	3	0	0	28	33.3
熊 大	8	2	5	0	15	17.9
佐 大	7	6	0	0	13	15.5
長 大	3	0	0	0	3	3.6
鹿 大	13	0	0	0	13	15.5
琉 大	7	4	1	0	12	14.3
男	53	9	1	0	63	75
女	10	6	5	0	21	25
合 計	63	15	6	0	84	100
(%)	75.0	17.9	7.1	0	100	

表1.から明らかなように、「共同授業参加のきっかけ」については、「自分から進んで」と答えた者が全体の75%、「友人のすすめ」18%、「大学（教官、事務官）にすすめられて」7%であり、自発参加者の割合が圧倒的に大きいことが目につく。また男女別にこれを見ると、女子に比べて男子の方が「自発的参加者」の率がやや高いことがわかる。ただし、女子の参加者数（10名）が男子の数の2倍に相当する熊本大学の場合、大学当局からのとくに熱心なすすめがあったことを考えると、本アンケートへの回答の男女差から、男子に比して女子が一般に共同授業への参加に消極的であると断定することは適当でないであろう。

次に今回の共同授業に対する期待度について、表2.の資料をみてみよう。すなわち、「非常に期待」は18%、「かなり期待」33%、「ある程度期待」41%、「あまり期待しなかった」8%で、初め二者を合

せても51%である。このことは、当初における学生の期待度は、それほど高いとはいえ、むしろかなりの者がそれほど期待を持ちえないまま、参加していることを示している。入学後一年間足らずの大学生活の環境におけるさまざまな失望の経験が、こうした期待度の低さに反映されていると見るのは、うがちすぎであろうか。なお、この点については、著しい男女差は認められないが、わずかながら、男子が女子よりも期待度が大きいという傾向はうかがえるようだ。

表2：参加前の期待度

質問2. この共同授業にどの程度期待していましたか。

大学	(1) 非常に 期待	(2) かなり 期待	(3) ある程度 期待	(4) あまり期待 していなかった	計
九大	3	9	15	1	28
熊大	4	6	5	0	15
佐大	2	3	4	4	13
長大	2	0	1	0	3
鹿大	1	6	6	0	13
琉大	3	4	3	2	12
男	12	19	27	5	63
女	3	9	7	2	21
合計	15	28	34	7	84
(%)	17.9	33.0	40.8	88.3	100

表3：共同授業終了時における満足度

質問3. この共同授業を終ろうとしている今、あなたはどの程度満足していますか。

大学	(1) 非常に 満足	(2) かなり 満足	(3) やや 不満	(4) 全く 不満	計
九大	13	12	3	0	28
熊大	7	8	0	0	15
佐大	2	9	2	0	13
長大	0	3	0	0	3
鹿大	2	9	2	0	13
琉大	3	9	0	0	12
男	22	35	6	0	63
女	5	15	1	0	21
合計	27	50	7	0	84
(%)	32.1	59.5	8.3	0	100

表3.の資料に基づいて、「共同授業終了時における、今回プログラムへの満足度」をみると、「非常に満足」32%、「かなり満足」60%、「やや不満」8%、「全く不満足」0%となり、満足している者は実に92%の高率を示している。またこの点については、男女差はほとんどみとめられない。このことから今回の参加者たちは、その殆んどがこの共同授業のプログラムに大きな満足をおぼえていることが明らかであろう。なお、満足の内容等については、後日に予定されている報告書に論述される筈である。

さて、この種共同授業の企画については、参加者の意見を反映することが必須の要件と考えられるので、共同授業の開催時期と日程（とくに期間）についての回答、ならびに講義などの内容面ならびに全体プログラムの運営に関する要望の自由記述などを求めた。

まず表4.で、「開催時期についての希望」をみてみよう。この回答項目の中には「3月」という選択肢を加えるべきところ、アンケート作成段階でそれが脱落してしまった。この点、回答内容の解釈においては十分な考慮が必要となろう。「夏休み」とする者が最も多く29%、「前・後期の移行期」（「10

表4：開催時期についての希望

質問4. この共同授業の開催に適切な時期について意見を述べてください。

大学	(1) 10月初め	(2) 夏期休業 7月10日過ぎ	(3) 10月中旬	(4) 12月下旬	(5) その他	(6) 解答なしもしくは2つ以上	計
九大	3	10	4	1	6	4	28
熊大	2	4	2	0	6	1	15
佐大	1	7	0	0	3	2	13
長大	1	1	0	0	0	1	3
鹿大	4	0	1	0	7	1	13
琉大	4	2	1	0	5	0	12
男	10	17	7	1	20	8	63
女	5	7	1	0	7	1	21
合計	15	24	8	1	27	9	84
(%)	17.9	28.6	9.5	1.2	32.1	10.7	100

月初」18%、「10月中旬」10%）28%などがつづいている。なお、「その他」が32%で多くなっているのは、今回の会期である「3月」の項目が選択肢に脱落したために、回答がここに集中したからであろうと考えられる。つまり、これらの回答内容から、今回の開催時期が必ずしも適当でないということとはできないということである。

表5.の資料によって、「開催期間の長さ」についての希望をみてみよう。全体的にみると、今回の3泊4日より1日多い「5日間」が48%で最も多く、「4日間」37%、「その他」14%となっている。こ

表5：日程（期間）についての希望

質問5. 日程（期間）は今回は4日間でしたが、一般に何日くらいが適当と思いますか。

大学	(1) 3日間	(2) 4日間	(3) 5日間	(4) その他	計
九大	0	10	15	3	28
熊大	0	9	5	1	15
佐大	1	3	5	4	13
長大	0	0	3	0	3
鹿大	0	4	7	2	13
琉大	0	5	5	2	12
男女	1	20	33	9	63
女	0	11	7	3	21
合計	1	23	40	12	84
(%)	1.2	36.9	47.6	14.3	100

のように「5日間」を望むものが全体として最も多かったとは言え、それは比較的男子に多く、かつ「4日間」をよしとするものがほぼ男子の3/3、女子の1/2を占めていることを考えると、「5日間」を最適であると即断することは差し控えたい。ただ今回の「4日間」（3泊4日）の会期の長さを不満とするものが多いことも、最後の全体討議の際の学生たちの発言に「せつかく仲よくなりかけたところでもうお別れというのは、物足りなく残念である」といった気持ちがかなり多く表明されていたことと考え合わせるならば、十分に理解できるところである。ともあれ、こうした共同授業の遂行には、関係教職員の有形無形の労力を要されることでもあり、また予算などの制約もあること、さらにまた、この種の催しにおいて、参加者の欲求が完全に充足されることが本来的に果して好ましいことであるかどうか（むしろ、何かしかのフラストレーションを残しておくことの方が、次なる探求へと学生たちを動機づけることになるのではないか）といったことなどを考えあわせると、今回の4日間（3泊4日）という会期の長さは、効果的であったと見てよいのではなかろうか。

なお、アンケートの質問6.に対する自由記述式の回答は、最終日の「全体討議」（このアンケート回答のあと実施）のなかに集約されたものとほとんど一致しているので、ここでは重複を避けることにする。

最後に、質問7.（友人への手紙文の形式で共同授業の感想を書きなさい）の回答内容は、若干名について無作為に抽出し、次に示してあるので参照されたい。

以上は、アンケートの項目に対する回答であるが、当日さらに若手の点について挙手による回答を求めたものがあるので、ここに付け加えておきたい。

第一は、「単位の取得」についてであるが、これを「欲する」ものは48名（57%）、「どうでもよ

い」ものは18名(21%)、「欲しくない」もの18名であった。

第二は、第二回目の共同授業の対象者の範囲に関するものであるが、「教養部学生に限るのがよい」19名(23%)、「教養部学生に限定しない方がよい」41名(49%)、「どちらでもよい」など24名であった。また「今回の6大学に限定してよい」とするものは17名(20%)、「6大学の枠をはずせ」は67名(80%)であった。この67名のなかには、「国立大学以外の大学も含める」というものも含まれている。

第三は、「九州地区を、2つないし3つの地域に分けて実施するかどうか」についてである。これについては、全員が、今回のような「全九州を一つの単位として実施する」方式に賛成を示している。

最後に、「メインテーマ」については、今回のような「文科・理科の総合されたものがよい」とするもの65名(77%)、残り19名は、「文・理に分けてもよいし、統一でもよい」という中立的意見であった。つまり、文・理の二領域に大別すべしという積極的意見は皆無であったということである。

アンケートの回答を全体として眺めてみると、学生たちの意見や希望には、互に両立しがたいものもあるようだ。たとえば、今回のような6つの大学に限定しても各大学からの参加者の数を制限しなければならなかったにもかかわらず、「全九州を単位としつつ」「6大学以外の国立や、さらに公私立にも枠を拡げるのがよい」とするが如きである。おそらく、彼らには、参加人員の定員ということに、さほどこだわっていないのであろう。しかし、こうしたいくらか一貫性に欠ける回答内容からこそ、かえって彼らの今次「共同授業」に対する好意的態度を読みとることができるとも言える。

ともあれ、これらのアンケートの回答内容は、参加した教官、職員たちの感触などとあわせて、次回共同授業の企画に際して有効に利用されるべきであろう。

(2) アンケートの自由回答欄(作文)から

ここに示すのは、アンケートの項目7に対する回答の内容である。84名の参加学生たちのうち、無作為に9名。(九大3、佐大1、長大1、鹿大2、琉大2、またうち女子は4)を抽出して掲載した。なお、全参加者の気持を代弁するものと解して、回答者の氏名は伏せることとし、所属大学、学部、性別のみを示すにとどめた。また、掲載された回答者の年齢、参加のきっかけ、始めの期待、回答時の満足度をも、参考のために示しておいた。

アンケートでは、「友人宛の手紙文の形式で自由に書いて下さい」と指示されているのであるが、アンケート実施が集団面接法の手続によったためか、多くは目前の実施者を意識して回答し、必ずしも「手紙文の形式」をふんでいない。それはそれで、よいのではないかと考えている。

最初に、この9篇のなかには熊本大学の学生のものも含ませていない。彼らも当然のことながら現地で回答してくれているのだが。その理由は、熊本大学では、帰学後全参加学生に詳しいレポート

提出を求めているのであり、それは会場で時間に追われて書いたものと、自ずから内容を異にするはずである。そこで、熊本大学の人は、3名に限り、次の(3)において示したので、この節とあわせて参照していただきたい。

①【九大、工学部、男子】（21歳、①自分から進んで、②ある程度期待、③非常に満足）

共同授業の計画があるということを知って参加申込みをするまでの間、正直に言って「2単位」という言葉が、私に強く作用していました。別に単位不足という切迫した状況にはなかったのに、「もらえるものなら何でも……」という心理でしょうか。それとこうした、いわゆる大学側の企画した行事にぜひ参加してみたいという気持ちもあったのです。その点では、スキー教室などと全く同じレベルで、この合宿をとらえていたのかも知れません。しかし、今年度の後期ごろからそのおもしろさがわかりかけていた一般教育科目への興味も、この共同授業への参加理由の一つでなったことも否認しません。さて実際に参加してみて、当初は他大学の学生たちとの接触もままならず、というより自分の方からすすんで話しかけることもなく、ただ他大学の先生の講義の目新しさに満足をおぼえるといった程度でした。しかし、2回目の夜、ふとしたきっかけから、九大の事務官の人たちとざっくばらんに話す機会がもてました。そしてその人たちから、学校側のこと、教官のことなどを聞いているうちに、何か今まで大学生生活のなかで、自分がすっかり見過していたものに気づいたように思いました。そして3日目の深夜、コンパのあと、ついに奥田先生のお話をうかがう機会にめぐまれました。酒のみ、教官と学生が一緒になって歌をうたい、語りあう。何とすばらしいことか！今まで一部の学生から与えられていた大学や教官についてのイメージを払拭できたように思います。そして、これまで、ただ一方的に、確かめもしないまま誤解しつづけていたことを恥かしいと思いました。とにかくほのほのたる気分になりました。こういうのを「感激」というのでしょうか。「教養部砂漠」といわれる六本松キャンパス、しかし一度こういう機会にめぐまれるならば、そして学生と教官とが本当に信頼感をもち合えるならば、本当の教養部の教育や生活が創りだせるのではないのでしょうか。

今回の合宿共同授業の、自分にとっての意義は、まさにそのことに尽きると言ってよいと思います。そしてその中で、先生と話し合えることのすばらしさを、初めて発見できたような気がします。

②【九大、薬学部、女子】（19歳、①自分から進んで、②かなり期待、③かなり満足）

私は、いま島原にきています。旅行ではなく、お勉強のためなんです。初めての試みとしての、九州地区六大学の共同授業があったからですが、私たちはそこで、他の諸大学の学生たちと集まり、講

義を聴き、そして何よりも友好を深めることができました。

これに申し込んだ当初は、単位が2単位もらえることの方が魅力的でした。でも今、3泊4日の合宿を終ってみて、単位のこととか、2,550円で3泊4日の旅ができたということなどよりもっと大切なものを得たことに、気付かせられています。

講義も、いろんな先生方から聴くことができました。もちろん、これまでもった授業と重複するところもないわけではありませんが、全く新しい知識に触れることもできました。

リクレーションにソフトボールのゲームがあったんです。私は、全くと言っていいくらい、このソフトボールができないし、それに出れば男子の人たちの足手まといになると思いましたが、女子は絶対に出場すべしということになって、ついに出ました。へたでも、ゲームに参加することで、これまで全く知らなかった九大生たちを知ることができたと思います。

そして最後の夜のコンパも、すばらしかった。これは当初のプログラムには予定されていなかったものですが、学生たちの代表〔注：学生側世話人会〕が結束してこのコンパを開催できたのです。学生も、カリキュラムに受動的に従うだけでなく、教官もこうした学生たちの申し出に耳を傾けてくれたということが、すばらしいと思うのです。

部屋割は、私の場合九大2人、長崎大1人、事務官1人の4人で、とにかく混合方式になっていたことがよかったと思います。欲を言えば、さらに熊大、鹿大、琉大の人たちとも一緒だったら、ということになりますが……。

私はどちらかと言えば、人の話の聞き手にまわる傾向があります。何故話し手になれないかと言うと、経験が少ないことと読書量が貧弱なことが、あげられそうです。昨晚というか、今朝というか、とにかく午前三時すぎまで、先生や男子学生の話のをきいていて、自分の知識のなさをしみじみと感じました。（でも話の聞き方というのも、結構たのしいものです。）そして、大学ではもっともっと勉強しなくては……と、痛感しました。

最後に、第1回のこの共同授業に参加できてうれしく思うとともに、こうした試みが今後もさらに継続されることを願ってやみません。

③【九大・医学部・男子】（19歳、①自分から進んで、②非常に期待、③かなり満足）

ひごろ同じ大学にいても、互にバラバラであるような学生生活のなかで、こうした形で、自校の学生だけでなく、他大学の学生とも親しくなる機会をもてたことは、非常によかったと思う。またいちばんの収穫は、何とんでも教授の方々と直接に話ができたとということである。一般の授業においては、多数の学生を相手に、教官が独りでしゃべるといふ形であるが、それはそれでよいとしても、

教官との個人的接触などは、ほとんど期待ではないように思われる。しかるに今回の合宿授業では、適度の酒精の力を借りてではあるが、教官と一緒にかなりつっこんだ話し合いができたし、今まで自分が教官に抱きつづけていた誤った印象にも気づきそれを修正することができたと思う。こういった点で、この授業に参加できたことは、ほんとうによかったと思っている。また未知の学生とも語り合えたということも、実にすばらしかったと思っている。惜しむことは、女性の参加が今ひとつ少なかった。しかし、それにしても、何人かの女性と知り合えたことだし、この点も大きな収穫であった。

講義については、ひごろの授業では聞けない内容を聴くことができたし、満足している。今後のこうした企画においても、人文・社会・自然の各学生からバランスのとれた人選がなされるとよいと思う。また大学関係者だけでなく、大学外の、あるいは在野のユニークな研究者、ジャーナリスト、評論家などの講演といったものも含めてもらえると、さらに充実すると思う。

今回の合宿で多少残念であるのは、日程が過密であったことだ。まあ「授業」という看板が掲げられているのだから、授業が主であることは理解できるけれど、他大学との交流、教官や事務官との交流ということにもまた、それに劣らぬウエイトを与えてほしい。その点、もう少し自由時間が欲しいと思うし、またハイキングなどの時間も、スケジュールに入れてほしかった。

今回のような交流は、非常に素晴らしいと思うが、同時にこれらのことを経験してみて、日頃の大学生活での交流の貧しさに、改めて気付かせられる思いである。

④【佐賀大・理工学部・男子】（19歳、①自分から進んで、②非常に期待、③かなり満足）

3泊4日の日程で、島原に研修にきています。九州の6つの大学から集った教官、事務官、それにわれわれ学生たちと一緒に語り合い、学び合うひとときでした。はじめは初対面の人ばかりで、声を掛けるのもままならぬほどでしたが、そのうち自然となれてきて、今では気軽に話しかけることができるようになりました。しかしもう別れなければなりません。

ふりかえてみると、自分の積極性が反省されます。もって自分の方から、他大学の学生にも働きかけるべきだったと思います。次の機会には、この経験を生かそうと思っています。

また日頃、大学の講義の内容やあり方に疑問をもっていただけに、今度の授業には期待をもっていました。しかし時間の余裕がないこともあり、講義のなかで討議の時間がほとんどとれなかったことは、残念でした。

しかしとにかく、この研修にきてよかったと思います。最後に、今回お世話になったすべての人たちに、心から御礼を申しあげます。

⑤【長崎大・医学部・女子】（20歳、①自分から進んで、②ある程度期待、③かなり満足）

新聞で、「共同授業」が企画されつつあるとの記事を読んだとき、ぜひ参加してみたいなあとと思い、大学に掲示の出るのを心待ちにしていました。私の場合の参加理由は、他の人とは少し違うかもしれませんが、みんなとこの点を話したわけではないので、よくはわかりませんが、かなりの予備知識をもってきている人は、この授業で自分の考えをさらに深めることができたと思います。私は20歳というのに、自分の住む世界が狭すぎると、最近つくづく感じるようになり、それを打破する何かのきっかけが与えられることを期待して、これに参加したのです。大学に入学後、一心になって没頭したことといえば、テニスだけであり、他の大学や他の学部に進んだ人たちと休暇で再会するたびに、みんなよくやっているなと、感心するばかりでした。女の子、いや女性として、社会に出ようというとき、女性であるまえに一人の人間として取扱ってもらいたいというものの、女の子ばかり集まったときの話題の狭さに気づいてハッとすることがあります。また医学部の専門課程に進めば、なかなかこのような講義をきくこともないでしょう。そう思うと、今のうちに、いろいろの分野の話をきき、少しでも自分の視野を広げておく必要のあることを、つくづく感じて、この共同授業のチャンスを逃してはならないと考えたのでした。

合宿に参加する前の5日間、授業に関連のある本を読みあさりましたが、実際の講義とはうまく結びつけられませんでした。しかし、こうして自らの努力と、ふだんは、そして今後永久にきくことのできない多くの生き方の講義を聴いたことは、きっと一生の思い出となるにちがひありません。長崎に帰ってからも、もういちどふりかえり、じっくりとこの4日間のことを味わってみたいと思います。

さて固いことばかり書きましたが、期間中には、予期していなかったことが、いろいろと起りました。他の大学の人たち—学生同志だけでなく、先生方—との交流は、なかでも最大の収穫でした。長崎大からは3人しか参加していないことを思うと、自分たちがよろこびを独占しているといった満足とともに、他の人たちにも、こういう機会が与えられるように願わずにはおられません。まさか、こんなに親しくなれるとは、思ってもみなかったのです。それには、ソフトボールや討議、また夜おそくまでのコンパなどの効果があったことはたしかです。時間が足りずに、すべてのことを書き尽せませんが、予想をはるかに上まわる結果に、我ながらおどろいています。この結果を、さらに確かなものとして持続できるかは、いつに私の心掛け次第です。将来医者になるものとしての貴重な体験として、これから先の人生に生かしていくつもりです。

一緒に過ごした皆さん、お互いに自らの道に向って、しっかり歩みつけましょう。
では、さようなら。

⑥【鹿児島大・農学部・女子】（19歳、①自分から進んで、②かなり期待、③かなり満足）

このごろ、「人間は何故生きるのか」ということばかり考えていたのだが、ただ本を読んで考えているだけでは堂々めぐりになるので、こういう共同授業に参加して、みんなと思い切り話し合ってみるのがいちばんいいと考え、これに参加した。そして実際に何かをつかめたような気がするのである。まず9日の夜の食事のよいにおどろいた。そのうえ建物もよい。史跡見学をふくめたプログラム全体も至れりつくせりである。私は、何か申し訳ない気持ちになった。大げさかもしれないが、「私たちは自分の使命といったものを感じるべきだ」と思ったほどである。

教官との個人的な交流をあまり持っていかったのは、少々残念である。しかし、これは多分に自分側の責任だ。私としては、いろいろの教官に、各自の生きがいをたずねたかったのに。

お酒があったのは、非常によかった。それも少な目であったのがかえってよかった。なかなかしゃべれない私など、ちょっぴり酔った勢いで、かなり話しができたのだから。

講義は、通常の大学の講義よりもずっとおもしろかった、ただ、終りの方で、毎時間質疑応答や話し合いの時間がとれないものかと思う。

いろんな人たちと出合ってみて、自分の考えの甘さがつくづく思い知らされた。

⑦【鹿児島大・法文・男子】（19歳、①自分から進んで、②非常に期待、③非常に満足）

参加する前からかなり期待していた共同授業だったが、まさに期待をうわまわるものであったと思っている。

ふつうはほとんど接触のない他大学の人たちとの交流は、何ととっても貴重だった。9日の朝に琉球大学の人たちを迎えて合流し、期間中を通じて深い友情で結ばれた。「姉妹校の関係を結ぼう」という話まで出たほどであるが、実際には、われわれの間では、すでにもう、そんな雰囲気になってしまっている。

ほかの大学の人たちとも、第1日目と夜の卓球や写真撮影(ぼくが写真の係)などで知り合いになれば、大学間の距離はぐっと縮まったみたいだ。やっぱり大学同志というのは、いろいろな仕方、大いに交流すべきだと思った。そして将来は、全部同じ大学にして（というより共通の講義を多くして）みた方がよいと思う。

とにかく、講義や討議だけでなく、今回のすべての人間的接触が、私に、かなりのショックを与えたことは事実です。

⑧【琉球大・教育学部・女子】（20歳、①友人にすすめられて、②ある程度期待、③かなり満足）

Kさん、今日は！

今、九州地区の各大学の友人たちと一緒に、同じ講義室で、この手紙を書いているところです。この共同授業は、私が大学に入って以来の経験であり、これから卒業するまでに再びこんな人間同志の交流が経験できるかどうかわからないと思えるほど、すばらしいものでした。

24時間船に揺られて鹿児島に上陸し、そのうえ5時間もバスに揺られてここに着いたときは、さすがにいい加減疲れはて、帰りたいと思いました。それに、周りの顔を見ると、どれも知らない人ばかり、なんだかおじけづいてしまったけど、4日も経たないうちに旧友のようにリラックスして、勝手なことをしゃべり合えるようになりました。

それに、他大学の先生方の講義も受けられたし、自分の学校以外のシステムや校風などにもふれることができ、これからの大学生生活に、とてもプラスになりそうです。

とにかく、共同授業に参加して、ほんとうによかったということだけをお知らせして、あとは再会したときにおしゃべりします。

⑨【琉球大・法文学部・男子】（20歳、①自分から進んで、②かなり期待、③非常に満足）

率直に言って、この研修は有意義で楽しかった。

スケジュールが少し詰りすぎていたが、それでも昔の「セミナリヨ」のスケジュールに比べると、まだまだ我慢できる。

とりわけ印象深かったのは、昨夜のコンパとそれにひきつづきもたれた「二次会」だ。ついでながら、今度のコンパは、僕がこれまで経験したなかで、最高のものだったと言ってよい。学生と教官・事務官の心が一つに融けあって、かつてない心の高まりを覚えた（もっとも、くじ運がよくて、僕の隣に某大の女の子が坐ってくれたこともあるが）。

学生は昔にくらべておとなしく、活気に乏しいと言われる昨今、あれだけみんなの心が通じ合い、盛り上ったことは、大きな意味があると思う。この4日間の研修は、おそらく僕の大学生生活のなかでも、最もすばらしい1ページとして、心に残ることだろう。

(3) 帰学後のレポート(熊本大学)から

熊本大学は、今回の共同授業に関する単位の認定は行わないことになっている。しかし、共同授業を終えて帰学したあと、参加者全員に「第一回九州地区国立大学間合宿共同授業に参加して」という題でレポートの提出を求めている。これらのうちから、3篇(男子1、女子2)を抽出してここに掲載する。

このレポートは、前節(2)のアンケートとはちがい、各自が十分な時間をかけて作成したものであるから、内容も詳しく、叙述もきめ細かくなっており、ある意味では、この共同授業全体の流れを参加学生自身の目で把握、評価しているという意味において、貴重である。なおここに掲載したものの以外のものも、ほぼ同様の内容であったこととお断りしておく。

①【熊本大・教育学部1年・女子】

私がこの計画に参加したのは、担任の勧めもきっかけであるが、九州地区の国立大学(今回九州・佐賀・長崎・鹿児島・琉球・熊本)の学生と教官が一堂に集まり、寝食を共にしながら研修することによって学生と教官並びに大学間の交流を深め、かつ、同一テーマ(今回「戦後世界における日本」)について、多面的に授業を進める、という目的にひかれたからだ。

大学生活も早や一年、いろんなことがあった。最初は、何でも真新しく感じられた。一方、入試時の断食ストの様子を見た瞬間から、大学内に暗い雰囲気が漂っているのを感じ、大学生活に不安を覚えた。他の大学はどのようなのだろうか、他の大学の学生はどのような生活をしているのだろうか、ということが知りたかったし、少しでも、現在の日本の位置を理解できたらと思い参加した。

第一日目(3月9日)の第一講義は、純心女子短大の片岡教官による「ヨーロッパ文化の日本伝来とヤミナリヨ教育」であった。特にセミナリヨのヒューマニズムとカリキュラムが印象に残った。それは、人格としての人間、調和的人間(心身の調和、知・情・意の調和、日本的ヨーロッパ的調和)の形成をめざしての教育であったが、やはり知性が優位に立っていたようだ。ここで聴いた言葉が、また、強く印象に残った。「無知はあらゆる悪の根元であり、徳の死である。殊に有害なのは人に教えることを職とするものの無知である」というのがそれである。常日頃、友達、先輩から、教師というものの重要性を説かれて納得はしていたが、後々のことのような気がして、いいかげんに過ごしてきたようだ。が、ここに参加してみて、いいかげんにできない事を身にしみて感じた。二日目で、印象に残っているのは、ソフトボールと自由討議である。ソフトボールはもちろんレクリエーションで、厳しさの欠けたものではあったが(決勝戦はそうではなかった)、一般的にスポーツというものは、

人を素直にさせる。スポーツの世界は素晴らしいと思う。スポーツマンの精神がそのまま世の中に通じたら、どんなによいだろう。やはり歪められるのを避けられないのだろうか。自由討議の議題は、学生側から出された案の中から、(イ) 当面の政治について、(ロ) 学園生活について、(ハ) 男女交際について、の三つが選ばれ、学生も三グループに分かれて討議がなされた。半分くらいは(ロ)に集まり私もその一人であった。各大学の各学部の学生生活の様子がここで話され、大変おもしろかった。講義では得られない交流が、ソフトボール大会で得られ、この討議でも深まり、三日目のコンパで頂点に達した。

第三日目の第一講義は、本大学の今江教官による「環境破壊と自然保護」であった。人間は、今や、自然界からはみ出している生物とみなさなければならない現状になっているといった内容であった。決して腐れない物質を製造し、その処理に困りながらも、なお生産を続けている。公害を生み出し、被害者も多く出しているというのに。対策をとらなければと感じながらも、これといった決め手となる対策はとらない。私達は、不便の少ない今の生活がこれからもずっと続くような気がする。人間の心理とはそういうものなのだろうか。第二、第三の講義は、「自然科学における国際協力」と題して、南極観測について話された。体験談だけに、九大の緒方教官、長大の松本教官の講義は、実感のこもった内容であり、私達は、ぐいぐいその魅力に引き入れられた。松本教官は、南極で写したカラーのスライドを披露しながらの講義であった。オーロラや、氷山の白と空・海の青が美しかった。小学校の低学年のころ、私は、アマゾン奥地を探検してみたいと切に思ったことがある。しかし、それは、単なる冒険心からで、科学的な考えなどはもちろんなかった。午後は、島原城と武家屋敷の史跡見学をした。学生側からの希望が認められて七時半頃からコンパが行なわれた。教官も学生も一つになって楽しいひと時を過ごした。大学ごとの出しものは、各大学の特徴が出ていて面白かった。琉球大はあの独物の旋律を持つ琉球民謡を歌ってくれた。熊大グループは、緒方教官(旧制五高出身)の思わぬ応援で、拍手喝采を浴びた。申し訳なかったのは、寮歌「武夫原頭に草萌えて…」という歌などをぜんぜん知らなかったことだ。これは自分の大学に誇りを持っていないことの一つの現われではないか。誇らしげ?に歌う他大学の学生がうらやましく思えた。私達もあのようにでなければならぬあと感じた。

いよいよ最後の日、「地殻における元素の濃集について」の講義があった後、全体討議があった。ここでは次のような反省、意見が出された。

- (イ) 大学という枠を越え、他大学の学生、教官と交流ができてよかった。
- (ロ) 部屋割はだいたい各大学にかたまってしまったが、各大学の学生を混ぜ、できたら教官も一人入るようにしたらどうか。(私は今度のような部屋割でいいと思う)
- (ハ) 資料は着いてから配られたが、これは前もって配っておくべきである。

(二) 授業については、少数ゼミナールもとり入れた方がよかったとか、あらかじめ決めた時間に制限されずに、内容により、伸ばしたり短縮したりするだけの融通性があった方がよい、など。

(ホ) 大学の教官でなくても、在野でユニークな研究をされている人を呼んではどうか。

(ハ) 国立大学生に限らない方がよい。(私はそれは別の計画に譲ってもいいのではないかと思う) 意見はいろいろ出たが、皆に共通していえることは、ほんとうに有意義な合宿共同授業であったということだと思う。今後さらに、この授業が発展し、各大学に良い影響を大いに与えることを期待する。

② 【熊本大・教育学部1年・男子】

まず、この研修旅行に参加した動機から述べて見よう。第一に「今の内に何でもやってやれ」と言う、全くの好奇心の一端からであり、次に安価な旅行、友人づくりなどであった。この時点では、他大学の学生との交流や教官と親密になる事などは、何処までやれるか事実、期待し得ないものだと何故か思い込んでいたようだ。ただ、説明会で今江教官に会ってから、後者の目的は十二分に達成し得るのではと確信するようになった。そして実際は、それどころか、他大学の教官とも親密になれ、共同授業の成果たるや多大なものであった。僕にとって、これほど充実した時間を過ごすのは、今後もそうあるものではないと言っても過言ではなかろう。なぜなら、それは僕の好奇心をより駆り立て、それを行動に移し得る勇気と方向づけを与えてくれたからである。以下に、私の心に大きな影響を与えてくれたものを掲げてみよう。

第一は片岡教官のセミナーヨ教育の講義だ。これには、将来教育者を目指す者として共感と感動を覚えた。しかし、それはそのまま受け入れるという事とは別で、感動の附属として、さらに教育について関心を持ち、自分を鍛えていこうという気持ちをかきたてられたということである。

第二は討論会である。各人多くの知識をもち、大学生活や青春について深く悩み、率直に意見を述べ合うのを聞きながら、自分の勉強不足を反省させられ、大いに刺激を与えられた。それ以上に、自分が、その場で意見を述べた事が何よりの収穫だったと思う。何でもやってみたいと思うものの、消極的で行動に移せずはにかんでばかりいた僕にとっては、発言することは勇気のいることだった。意見を言っているときも、あがってしまって、自分でも何を言っているのかわからず、気持ちだけは理解してもらえたらうが、論理性に欠け、ほとんど意味が通じなかったのではないかと深く反省している。しかし、やっぱり今は言ってみようという満足感に浸っているのである。たったこれだけの事が、これからの僕にとって、偽ならず、飾らず、率直に自分の意見を堂々と言えるようになる端緒になったと思うと不思議でもある。

その翌朝6時頃、日の出を見るのだといって、熊大の連中に叩き起こされた。朝冷えのする中をポ

ケットに手を突っ込み、足踏みをして肩を縮めている僕らの目の前にオレンジ色の光がわずかに覗いた瞬間、全員いっせいに跳び上がり、手を取りあって喜んだ。この旅行そのものの感動にも似ている。何か全ての物事の始まりを感じたが、「これから始めるのだ」と改めて自分に言い聞かせた。そして、みんなで坂道を、日が見えなくなるまで駆け下り、もう一度、山から日が昇るのを見ようという新たな試みをしたのだった。

最後に、反省会の意見も含めて、この研修旅行の意義や成果についてまとめてみよう。先ず、同じ大学内でも知らぬ者同志であったのが、他大学との接触によって同じ大学としてのまとまりが出来、互いに親しくなったことがあげられる。ここ迄はどんな旅行でも同じであろう。ところが、寝食を共にするにつれて、学生同志として大学間の閉鎖性が取除かれた。他大学の学生と、敢えて接触してみようになった。さらに風呂で背中を流したり、コンパで一緒に歌ったりすることにより、接してみなくちゃわからない人間同志のつながりを理解した。そういう場面では、学生と教官というボーダーラインは、既にとり払われていた。ある人は次のように言った。すなわち「学生として自分が、これまで描いてきた教官というものの像が、この場ではっきりと打ち砕かれた。こうした覚醒の体験は学生運動の根本的解決につながるのではないかと。教官側から、この交流はこれからも続いてゆくのだと結ばれた。

各大学の学生たちは、別れる場に至って、熊大生の乗った帰りのバスを離そうとしなかったほど別れを惜しんでくれた。あいつらと握りしめた掌の熱さが、今も右手に残って、この旅行記を、狂おしげに書かせているようだ。

③【熊本大・薬学部・女子】

行って良かったと言うより他はありません。早速友だちに、手紙でこの事を知らさずにはおれなかった程です。みんなもかなり感激していたようです。

講義を通しては、教養部にいることの意味がいくらかつかめて来たように思うし、謙虚さを失くしていた自分を発見できたと思っています。大学で学ぼうとする姿勢を、私は考えることが出来るように思います。これまでのような態度では、大学生だということが恥ずかしいと言わねばなりません。友人に会う度に、今度の研修の事を伝えていきます。私もまた行けるのだったら、是非行きたいものです。

なんと言っても今度の経験は、私には大きなものでした。討論会などで他の人の考えを聞いているうちに、自分の目的のない生活を思い、漠然としていてまだ言葉で表わせる程にはっきりしてはいませんが、なにかしら積極的にやろうという気持ちが湧いてきました。こんなに気持ちが変わるなんて……と、ほんとに私はうれしいのです。他の大学の人たちと交わることが出来たのもうれしいし、また自

分が熊大生であることも良かったのです。熊大生は皆仲良しで、早朝マラソンをしたり、徹夜で語り明かして日の出を見て「ばんざい」までやりました。

研修とともに過ごした人たちと別れる時はやっぱりつらかったけど、友情はそこで行き止まりなんじゃなくて、発展の可能性もあるんです。私なんか、研修が終わって3日目にもう葉書をくれた人がいるので、早速返事を書きました。なにしろ行って良かったのです。研修に行かなかった私なんて考えられない！あの日研修に行かなければ、どんな学生になっていたでしょう。ただ、ただ有意義でした。

(4) 第一回共同授業を終わって

緒方道彦(九州大学)

今回の授業に参加して、やはり現行の教養課程教育の問題点が何処にあるのかを、あらためて痛感させられたといえる。

学生84名に対して、教官11名・職員10名、その上合宿形式である。これだけ密度を高めれば、今日でも相当な教育効果をあげることが実証されたというのが、感想の第一である。

しかし、物理的な密度のみではあるまい。学生は問いかける熱意をもち、教官は何かを伝えようと努力し、職員は運営に工夫を凝らした四日間であった。初心というか、はじめての試みであるだけに心構えの濃度も高かった。これが感想の第二である。今後さらに続けられるとすれば、運営・企画に当って重要なのは、密度もさることながら、心くばりの濃度であろう。定式化がすすみ、恒常的なものにならぬことが肝要である。

技術的な面については、実施記録の全般を検討すればよい。しかし、初回の雰囲気―熱気―とでもいうものをどう保持するかを、その都度考えねばなるまい。

“勉強しなくては”、“何も知らないことが解った”などの学生たちの感想は貴重である。このような意欲の触発が、おそらく最も評価される点ではないだろうか。現行の大学教育体制のなかでは、参加したものは極く限られた人数でしかないが、今回のような試みが実施されたのはよかったし、今後も続いてほしいことである。

しかし、率直なところ、共同授業と合宿研修のどちらがより効果をあげたのかは、はっきりしない。皆が、相互に識り合ったのが基盤であり、これだけなら合宿研修でもよい。勉学意欲の触発は、講義に直結したものでは必ずしもなかったようである。とにかく何でもやらなければならないというのは、一般教育の大前提ともなるという意味で、テーマに直結する必要はないであろう。ともあれ、単に友人・知己がふえ、教官・職員とも識り合ったという以上に、“勉強もしたい”という感想が現われた点に、

共同授業の意味をおくことができるかもしれない。

この手法は、新しいものではない。嘗ての旧制高校でありえた姿であり、現在でも、小人数教育が可能であれば期待するものである。ただ、現行の教育体制で何が欠落しているのか、このごろの学生世代が何を望み、何に飢えているのかを浮彫りにしてみた上で、さて多人数・一般教育の現状をどう改善したらよいのか、意欲の触発をどうしたらよいかということ、もう一度考えさせられたというのが、感想の第三である。



5. 総 括

奥 田 八 二（九州大学）

総括などというと、一人の筆者が一定の価値判断をおしつけてしまうことになるかも知れないので、ここでは単にこの場を借りて、共同授業に参加し責任の一端を担った者の一人としての感想を、総括風にしるすだけにとどめる。

共同授業を終わってみて一番感じたのは、参加学生の感動であり躍動であった。ある学生は、感想文の中で、共同授業に参加する前の自分の存在はすでに考えられないとまで言い切っている。ほとんどの学生が満足し、今後の学生生活に、この短期間の感動を生かすべく決意して散会したように思える。いわば、学生生活に一つのエポックを与えたい。

講義内容については学生なりの批評や意見があり、主催者側にも反省点がなくはない。しかし、学生のレポートや感想文を読んだり、直接学生から印象をきいた限りでは、講義の多くはほとんど消化されないままのようであった。不消化のまま嚙下したか、頭のどこかにほうりこんでしまって、内容などどうでもよいかのごとくである。講義をふまじめにきいた者は一人もいなかっただろう。参加全教官が全学生と同室に集まり、講義者の教官を除いて聴講生の側に坐し、これまたまじめに拝聴した。講義は時間どおり始まり、時間どおりに終わった。学生は、レジメをもとに一ぱいノートした。しかし結果として、講義内容の多くは理解されているふうにはみえない。元来、講義というものはそういうものなのかも知れない。またそれでよいのかも知れない。いつの日か、必要なときに引き出せる状態にあればよいのであろう。

それよりも学生は、教官の些細な言葉の端々、行動の局部をきわめてセンシティブにとらえて自己の中に取り込んだ。それは学生が、他大学の学生又は隣にいた学生の言動をとらえる場合も同様であった。コンパや全体討議、自由討議の経過内容などをみても、それは必ずしも豊かであったとはいえないかも知れないが、こんな時に、多くの学生は白紙にインキを落したように他人の言動を鮮明に感受しているのである。このようなことは当り前の現象であるといえればそれまでであるが、少くとも私自身、この年齢期の学生の感受性の強さに、近頃あまり関心を寄せていなかったことを反省せざるをえないし、このことを再認識したことが教師としての私の、この共同授業からの最大の収穫だったように思う。理論を教えてやろうということに急で、何を受けとってもらえるかということへの配慮が少なかったように思う。

学生が感想文の中で多く書いたことは、（他大学の）先生や友達と親しく接することができたことが収穫だったということである。彼らは単に先生や友達と接したのではなく、接することによって自

分を再発見し発奮したのである。

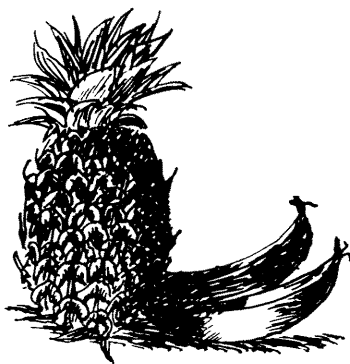
共同授業に参加した学生の多くは、日常の学生生活の中で、「先生や友達」に飢えているような部類の学生ではなかろうか。サークル活動や課外活動に積極的に参加するでもなく、積極的に教師を訪問するでもなく、そうかといって孤独を愛し打ち沈んでいくでもない、どちらかといえば、最も平均的で中位に近い、最も多教の学生がそうであるような型の学生があったように思われる。今日の国立大学の施設、教職員の教育サービスは、このような層の学生にまで手が届かない状況にあるとってよかろう。最も多くの、この種の学生が教育サービスの「谷間」に放置されているように思える。彼らは心身ともに健康であるがゆえに、特別の配慮は要しないかの如くであるが、共同授業をやってみて、この、学生の最多者が日常教育の配慮の外におかれていることが発見できたように思われるのである。

平素の大学では、いわゆる「問題学生」だけが配慮の対象となっているの如くである。その問題に大学は多くの労を費しすぎて疲れ果てている。最も多数の健全な学生は、アピールすることの少いがゆえに、放置されている。この共同授業は人員・予算・施設などの面で、平素の教育サービスに比し、かなり濃密なものであった。この濃密なサービスをやってみてはじめて、平素の大学教育に何が足りなかったかを知らされたのである。

「問題学生」のアピールへの対応に忙殺されている大学は、正常な大学とはいえない。われわれは正常な大学のあり方を知らないまま、久しく過ごしてしまったようだ。とくに今日の国立大学の教養部では、このことがいえるのではないだろうか。共同授業は単位の互換や大学間の格差解消とかの第一歩である、と解するにはまだ早い。そういうことに結びつけて考える必要は当面ないだろう。むしろ共同授業は、「教養部」を再発見する一手段だといってよいと思う。日常性から解放されてみて、自分自身がわかるのである。そういう自分だということなのである。不断の健康への配慮が病気を予防することであると同様に、最も多数の、正常な学生への配慮が「問題学生」発生を予防することになるのではないだろうか。共同授業は、このように多くのこと、根本的なことを、教師であるわれわれに考えさせてくれた。

最後に、とくにのべておいてよいと思うことが一つある。私は不断、教養部の学生をみていて高校の時に規律や整頓や清掃がちゃんとやれていた者が、大学に来るとどうしてそれらの点でダメになるのかわからなかった。多分大学側に問題がある、とは思っていた。この共同授業の中で、狭い経験ながら、このことが実証されたように思う。共同授業中の学生は、すべてが立派だった。合宿生活のすべてにわたって、世話人学生のもとによく統率され、教官側との意思疎通もでき、もの分りもよく、不足はなかった。示唆すれば十分であった。但し、示唆を与えることは絶対必要であると思う。教官側の意図がどこにあるか、何を要望するか、それを学生側に明示することは絶対に必要である。それ

があれば、学生はどの層の市民よりも立派な市民性をもっていることがわかった。平素の大学では、必要な示唆も、その明示も、いい加減になっているように思われるのである。



付録(1) 開催通知見本

九大教養庶第331号
昭和52年2月1日

殿

九州大学教養部長
奥 田 八 二

第一回九州地区国立大学間合宿共同授業の実施について（通知）

このたび、このことについて実施を正式に決定し、受講学生を募集することになりました。ついては、別添要項により募集を行いますので参加者名簿を2月25日までに九州大学教養部庶務掛宛（〒810：福岡市中央区六本松4-2-1）ご送付下さい。

なお共同授業担当教官（授業担当教官）には、下記のことをお含みおきの上、講義準備を取り進められますようご連絡方よろしく申し上げます。

記

- (1) 授業担当教官は必要があれば学生配布用として講義要録110部を共同授業開始当日ご持参願います。
- (2) 又、あらかじめ20部を3月1日までに教養部庶務掛宛送付願います。
- (3) 授業担当教官で3月11日(金)に予定している「スライドと話」の時間に利用できるスライド（テーマは問いませんがなるべく学問的課題のもの）をお持ちの方は各人20コマ以上ご準備願います又この場合、スライドのテーマをお知らせ下さい。
- (4) 往復旅行及び研修センターにおける当該大学学生の引率責任者の職・氏名を明確にしておいて下さい。

なお引率責任者は授業担当教官の方が望ましいが、差し支えがある場合は他の教官又は職員で引率責任者となる方の職・氏名を明らかにして下さい。

- (5) 授業担当教官・引率責任者の滞在計画を把握したいので別紙滞在計画表によりご連絡願います。

第一回九州地区国立大学間合宿 共同授業実施要項

1. 目的 九州地区国立大学の学生と教官が一堂に集まり、寝食をともにしながら研修することによって、学生と教官並びに大学間の交流を深め、かつ、同一テーマについて多面的に授業をすすめることを目的とする。
2. メインテーマ 「戦後世界における日本」
3. 主催 九州大学教養部
4. 会場 九州地区国立大学島原共同研修センター。(島原市礪石原町甲1201番地
電話 島原09576-4-2201 〒855)
5. 開催期日 昭和52年3月9日(水)~12日(土)の3泊4日間
6. 参加資格 佐賀大学教養部、長崎大学教養部、熊本大学教養部、鹿児島大学教養部、琉球大学教養部、九州大学教養部に在籍する学生
7. 参加人員 100名(佐賀大学15名、長崎大学15名、熊本大学15名、鹿児島大学15名、琉球大学15名、九州大学25名)
なお、参加人員100名のうちには、共同授業担当教官及び引率責任者を含む。したがって、当該大学の参加学生数は(15名-参加教職員=参加学生数)とする。
8. 日程
 - 第1日(3月9日)
 - オリエンテーション
 - 講義「ヨーロッパ文化の日本伝来」
 - セミナリヨ教育のこと—
 - 交歓夕食会
 - 映画又は自由討議
 - 第2日(3月10日)
 - 講義「戦後日本の経済発展」
 - 〃 「戦後日本の対外政策」
 - 安保制と対アジア政策を中心として—
 - 〃 「戦後沖縄における復帰運動の生成と展開」
 - 戦後世界における沖縄—
 - ソフトボール大会
 - 講義「戦後日本における農村社会の変貌」
 - 映画又は自由討議

○ 第3日(3月11日)

講義「環境破壊と自然保護」

〃 「自然科学における国際協力」(海外学術調査)

〃 「
」(南極観測)

グループ別討議及び史跡見学

スライドと話

映画又は自由討議

○ 第4日(3月12日)

講義「地殻における元素の濃集について」

全体討議

㊦日程表別紙

9. 講師と講義題目

(1) 「ヨーロッパ文化の日本伝来」

—セミナリヨ教育のこと—

九州大学非常勤講師
(純心女子短期大学教授)

片岡 弥吉

(2) 「戦後日本の経済発展」

九州大学教授

奥田 八二

(3) 「戦後日本の対外政策」

—安保体制と対アジア政策を中心として—

佐賀大学教授

岡本 宏

(4) 「戦後沖縄における復帰運動の生成と展開」

—戦後世界における沖縄—

琉球大学助教授

比屋根 照夫

(5) 「戦後日本における農村社会の変貌」

九州大学助教授

福留 久大

(6) 「環境破壊と自然保護」

熊本大学講師

今江 正知

(7) 「自然科学における国際協力」(海外学術調査)

九州大学教授

緒方 道彦

(8) 「自然科学における国際協力」(南極観測)

長崎大学教授

松本 徑夫

(9) 「地殻における元素の濃集について」

鹿児島大学教授

浦島幸世

10. 参加申込 (1) 参加希望者は、当該大学教養部担当係へ参加費を添えて申し込むこと。
ただし既納の参加費は還付しない。
(2) 当該大学は、参加者の名簿を2月25日までに九州大学教養部宛に送付する。ただし、参加費は3月9日(第1日目)に研修センターにおいて払い込むこと。
11. 参加費 食費：2,550円(3月9日夕食より3月12日昼食まで)
12. 単位の認定 当該大学の授業の一部と見做し、各大学の判断において、単位を認定する。
ただし認定することのできる単位数は2単位までとする。
13. その他 (1) 持参品 筆記用具、ノート、洗面具、着換え類、パジャマ、運動靴など
(2) 集合 参加者は、各大学毎にまとまって3月9日(水)午後3時までに九州地区国立大学島原共同研修センターに集合すること。
(3) 解散 3月12日(土)午後1時現地で解散するが、参加者は各大学のバスで輸送する。

メインテーマ 「戦後世界における日本」

時 日	7	8	9	10	11	12	13
3月9日(水)							
3月10日(木)	起 床	朝 食	講義 「戦後日本の 経済発展」 九 大 奥田教官	休 憩	講義 「戦後日本の対 外政策」 —安保体制と対 アジア政策を 中心として— 佐大・岡本教官	昼 食	
3月11日(金)	起 床	朝 食	講義 「環境破壊と自 然保護」 熊 大 今江教官	休 憩	講義 「自然科学にお ける国際協力」 (海外学術調査) 九 大 緒方教官	昼 食	
3月12日(土)	起 床	朝 食	講義 「地殻における 元素の濃集につ いて」 鹿 大 浦島教官	休 憩	全体討議 九 大 安藤教官	昼 食 (反省茶話会)	

注) 講義・及び映画・スライドは大ゼミナール室で行う。

共同授業日程表

13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
		受付	自由時間	オリエンテーション	講義 「ヨーロッパ文化の日本伝来」 —セミナーヨ教育のこと— 九大非常勤講師 片岡教官	交歓夕食会	映画又は 自由討議	自由時間	消灯就寝	
		担当教官 打合会				入浴				
講義 「戦後沖縄における復帰運動の生成と展開」 —戦後世界における沖縄— 琉大・比屋根教官	ソフトボール 大会			自由時間	夕食	講義 「戦後日本における農村社会の変貌」 九大福留教官	映画又は 自由討議	自由時間	消灯就寝	
				担当教官 打合会	入浴					
講義 「自然科学における国際協力」 (南極観測) 長大松本教官	グループ別 討議 及び史跡見学			自由時間	夕食	スライド と話	映画又は 自由討議	自由時間	消灯就寝	
					入浴					
解 散										

九州地区国立大学間合宿共同授業担当教官等出席者滞在計画表

大学教養部

職名	氏名	研修センター 到着日時 月 日 時	宿泊等希望の有無												備考	
			3月9日			3月10日			3月11日			3月12日				
			交 夕 食 会	宿 泊	朝 食	朝 食	夕 食	夕 食	朝 食	朝 食	夕 食	夕 食	朝 食	朝 食		夕 食

※ 1. 引率責任者には◎印を。 2. 宿泊等希望の有無欄には該当個所に○印を付して下さい。

共同授業参加者名簿

大学名

No	氏名	学部・学科名	学年	年令	性別	備考 (留守中の連絡先、TEL)	No	氏名	学部・学科名	学年	年令	性別	備考 (留守中の連絡先、TEL)
1					男 女		12					男 女	
2					男 女		13					男 女	
3					男 女		14					男 女	
4					男 女		15					男 女	
10					男 女								
11					男 女								

※ 参加学生の留守中の連絡先・電話番号等は各大学で承知しておいて下さい。

付録(2) 評価のためのアンケート

第一回九州地区国立大学間合宿共同授業のアンケート

昭和52年3月9日～12日実施

—あなたのこと—	
(1)	_____大学_____学部_____年次入学
(2)	性別： 男 女
(3)	年令_____歳

- この共同授業に参加することを決めたきっかけは何ですか。
 - 自分から進んで参加した。
 - 友人(たち)にすすめられて参加した。
 - 大学(教官・事務官)にすすめられて参加した。
 - その他()
- この共同授業にどの程度期待していましたか。
 - 非常に期待していた。
 - かなり期待していた。
 - ある程度期待していた。
 - あまり期待していなかった。
- この共同授業を終ろうとしている今、あなたはどの程度満足していますか。
 - 非常に満足している。
 - かなり満足している。
 - やや不満である。
 - 全く不満足だ。
- この共同授業の開催に適当な時期について意見を述べてください。
 - 10月初めころ。
 - 夏季休業に入るころの7月10日過ぎ。
 - 10月中旬ころ。
 - 12月下旬ころ。
 - その他_____月ころ。

5. 日程（期間）は今回は4日間でしたが、一般に何日くらいが適当と思いますか。

- (1) 3日間程度。
- (2) 4日間程度。
- (3) 5日間程度。
- (4) その他（_____日間）

6. この共同授業の内容について、あなたの率直な意見を記入して下さい。

(1) 講演・講義・討議などについて：

(2) 時間配分について：

(3) その他：

7. この共同授業全般を通じて、あなたはどんなことを学び、または感じましたか。友人宛の手紙文の形式で自由に書いて下さい。（スペースの足りないときはウラへ → ）

付録(3) 共同授業参加者の心得

参加者は講義、討議等に出席するにあたっては、共同授業の目的達成のため次のことを守られたい。

1. 授業の日程表は、センターの日課に準じて組まれているので、それぞれの時間を厳守すること。
2. 期間中は責任者の指示に従って行動すること。
3. 各室備付けの備品は移動させないこと。
4. 備品の借出し、施設の利用等については、各大学の責任者を通じて行なうこと。
5. 火気については、細心の注意をはらい、喫煙は必ず、灰皿のあるところのこと。
6. 期間中は定められた名札を左胸に付けること。
7. 自由時間といえども他人の迷惑にならないよう心掛けること。
8. その他センターのとりきめに従うこと。